令和３年度

研究紀要

（第１７集）

～ 異文化交流エッセイ集 ～

『世界とつながり、心豊かに生きる子どもの育成』

山口県国際教育研究会

はじめに

研究紀要の作成時期となり、久しぶりに昨年度の紀要を手に取りページをめくってみました。昨年度は、新型コロナウイルスに始まり新型コロナウイルスで終わった年であり、本会としても研究紀要を作成することぐらいしかできない１年でした。令和３年度も前年度と社会の状況に大きな変化はありませんでしたが、なんとか昨年度以上の成果を残したいというのが会員の強い思いでした。しかし、予定していた夏の研究大会も直前に新型コロナウイルス第５波のあおりを食らい延期となりました。その中でも、山口県以外の中国地方４県から実践事例を送っていただき、その取りまとめができたことはせめてもの救いでした。また参加者を限定しての会であったため大々的にアナウンスはできませんでしたが、今年度は帰国者報告会も行うことができました。帰国された２名の先生方のお話に私たちも久しぶりに刺激を受けました。延期した夏の研究大会も１月開催予定で準備を進めてきました。しかし今度は第６波の影響で急遽オンライン開催とはなりましたが、なんとか予定していた内容で行うことができました。

このように新型コロナウイルスの影響で様々な制限はあるものの、本会の活動を進めていくことで、多くを自粛していた昨年度と比べて手ごたえをつかんだ１年でもありました。特にオンラインでの活動実績を積んだことは、新たな可能性を強く感じました。国際理解を進めるには、受け身でいるのではなく異文化に積極的に足を踏み入れ、互いを理解し共感し分かり合うことが大切です。ある意味オンラインは私の中では異文化であり、未知のオンラインに受け身の姿勢が強かったように思います。しかし、講師や参加者をオンラインでつなぎ研究大会を行う中で、このツールは国際教育に必須のものだと遅ればせながらも気付きました。居ながらにして、その時の生の情報を気軽にやり取りできるこのシステムを活かさない手はないと感じました。新型コロナウイルスの脅威はまだまだ続きそうですが、今はそうした中でもこれまで同様、いやこれまで以上の活動が展開できるのではと次年度の構想に思いを膨らませています。

昨年度以上の活動ができたとはいえ決して多くの実績を残せたわけではありませんが、本誌は会員がこれまで築いてきた実践や本会の今年の足跡を形にしたものです。手に取られた方には、本会の活動や本誌の内容を近くの誰かと何かの話題にしていただければ幸いです。また、本会の活動をいつも支えていただいています山口県教育委員会様、山口市教育委員会様、山口県国際交流協会様、独立行政法人国際協力機構ＪＩＣＡ中国様など各団体の皆様に改めてお礼申し上げます。

山口県国際教育研究会
会長　　藤井　智寛
（山口市立湯田小学校　校長）

目　　次

◇ はじめに　山口市立湯田小学校　校長　藤井　智寛　…　1
◇ 目　次　…　2

Ⅰ 異文化交流エッセイ集
心、ここにアラブ
平成 17 年度派遣　アラブ首長国連邦　アブダビ日本人学校
防府市立華城小学校　教諭　山本　直　…　3
Enjoy!　～ 『NJ だより』から ～
平成 20 年度派遣　アメリカ合衆国　ニュージャージー日本人学校
周南市立鹿野小学校　校長　荒木　裕二　…　6
学校だより「JSKL 通信」送信メール文　～ 2018 年 4 月～2021 年 3 月 ～
平成 30 年度派遣　マレーシア　クアラルンプール日本人学校
下関市立垢田小学校　校長　神田　哲　…　12
蘇州だより
令和２年度派遣　中華人民共和国　蘇州日本人学校
下関市立王喜小学校　教諭　櫻井　紀邦　…　20
ドイツから日本の伝統文化を思う
令和３年度派遣　ドイツ　デュッセルドルフ日本人学校
シニア派遣　教諭　藤本　浩行　…　26
The Singapore シンガポール通信
令和３年度派遣　シンガポール　シンガポール日本人学校クレメンティ校
防府市立松崎小学校　教諭　寺内　健　…　31

Ⅱ 外国語教育・国際教育の実践
外国語科における指導と評価の一体化について
山口市立二島小学校　教諭　藤元　涼太　…　38
外国人児童教育の実践と課題
平成６年度派遣　オーストラリア　パース日本人学校
山口市立平川小学校　教諭　辻本 紳一朗　…　45

Ⅲ 第 28 回山口県国際教育研究大会
「ちがい」について考えよう　～ みんなが住みやすい社会にするために ～
JICA 中国　山口デスク　小川　真奈
平成 17 年度派遣　アラブ首長国連邦　アブダビ日本人学校
防府市立華城小学校　教諭　山本　直　…　53
「小学校外国語教育　全面実施後の成果と課題を振り返る」
～ 学習評価から見直す指導の在り方 ～
文部科学省初等中等教育局　視学官
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官・学力調査官
直山 木綿子　…　55

Ⅰ　異文化交流エッセイ集

心、ここにアラブ

防府市立華城小学校　教諭　山本　　直
（平成 17 年度派遣　アラブ首長国連邦　アブダビ日本人学校）

１．アラブに到着

「ここがアラブか！」「夜中の２時なのに暑いぞ！」

平成 17 年４月に、「アブダビ国際空港」（アラブ首長国連邦）に降り立った時の第一印象である。気温は約 28 度、湿度は 75%。お風呂の脱衣所にいる感じである。

深夜にもかかわらず、派遣教員の先輩方、大使館関係の方が空港に迎えに来て下さっていた。スクールバスでフラット（日本でいうマンション）に連れて行っていただいた。

この年の派遣教員は、私一人であった。それにもかかわらず、大勢の方々にお迎えをしていただき、本当にありがたいことである。

アブダビの夜景

フラットに着いて、とりあえず、電話をした。無事にアブダビに着いたことを日本の家族に知らせるためである。そのときに置いてあった、

「ようこそ！アブダビ日本人学校へ」のメッセージと電話のかけ方を書いた手紙、「エジプト米」で作っていただいた「おむすび」の美味しい味は、今でもはっきりと覚えている。「なんとかアラブで頑張っていけそうだ」という勇気とパワーをいただくことができた。

ベッドに横になって、ウトウトしていたら、突然の大音量が聞こえてきた。時計の針は、午前５時過ぎ。

「アッラー、アクバル」「アッラー、アクバル」「アザーン」（イスラム教の信徒に対して礼拝の時刻を告げる呼び声）である。アブダビ市内のあちこちに「モスク」があり、フラットの側のモスクから流れてきた。

「これが、アラブか・・・」

「これが日本人学校の派遣教員のスタートか」

と驚きとともに、なんともいえない感動をしたことを覚えている。

アブダビの海

２．アラブの第一印象

「とにかく暑い！」「一年中暑い！」

これが、アラブの第一印象である。

しかし、建物の中は「完全冷房」であり、どこに行ってもキンキンに冷えている。

「外は暑い。しかし建物の中は寒い！」

これも、アラブの第一印象である。

「アラブ人は、親切！」「よく声をかけてくれる」
アラブ人に対する印象である。

道に迷った時には、親切に教えてくださったことがたくさんあった。また、アラブ人が BBQ をしている時は、「一緒に食べよう」と声を掛けられることが何度もあった。アラブ人の優しさは、おそらく「イスラムの教え」のおかげだと思う。優しい人に本当に多く出会った。

アラブ人との交流

「金持ちの国だなあ」「いろんな世界一があるな」
これも、アラブの第一印象である。

いわゆる「オイルマネー」は絶大である。石油が出る前、約５０年前は、「ラクダ」と「ランプ」と「移動型テント」の生活だったのが、「ラクダ」が「高級車」になり、「ランプ」が「イルミネーション」になり、「移動型テント」が「高級リゾートホテル」に凄まじい勢いでで変わった。「オイルマネー」は凄いにつきる。

世界一大きなキャンピングカー

世界一大きな国旗

３．アラブと日本とのつながり

「アラブの石油のおかげで、日本は生活できる」
「日本の車の４台に１台はアブダビの石油で動いている」
先輩方から聞いた話の中で、記憶に残っている話である。

日本とアラブとの関係について身近に感じたのも、アラブでの生活のおかげでだといえる。そして、日本の国益のために働いている人が、こんなにたくさんいることもアラブに来て分かったことである。いわゆる「スーパー日本人」に出会えたのも人生の宝物の一つである。

総理の訪問

４．アラブの砂漠

「砂漠に遊びに行こう！」「砂漠で初日の出を見よう！」

アラブの生活の楽しみの一つに「砂漠」がある。「砂漠」は、本当に綺麗である。

特に、夕日が沈むころに影ができ、コントラストがはっきりするととても綺麗である。

アブダビ日本人学校の特色ある行事に「砂漠遠足」がある。小学部の低学年が行く行事である。児童は、本当に楽しみにしていて、砂漠の中を走り回っていた。

また、「砂漠キャンプ」という行事もある。小学部の中学年・高学年、中学部が行く行事である。子どもたちは楽しみにしていて、生き生きと活動していたことを覚えている。

「地域の特色ある活動」に取り組むことは、本当に大切だと思う。

砂漠遠足

５．おわりに

「アブダビって何処にあるの？」

「中東は大丈夫なの？」

出国前は色々な情報があり、周囲の人から心配していただいた。家族も心配していた。

しかし、いざ入国すると本当に充実した毎日で、あっという間の３年間であった。家族にとっても「宝物」の３年間であり、今でも「アブダビ」「UAE」「アラブ首長国連邦」というワードを目にしたり耳にしたりすると、すぐに反応してしまう。まさに「第２の故郷」である。この「宝物」を大切に、今後も国際教育に関わっていきたい。

夕方の砂漠

アブダビの風景

Ｅｎｊｏｙ！　～『ＮＪだより』から～

周南市立鹿野小学校　校長　荒木　裕二
（平成 20 年度派遣　アメリカ合衆国　ニュージャージー日本人学校）

１．はじめに

ニュージャージー日本人学校での勤務を終えて帰国してから、あっという間に 10 年が過ぎました。帰国を間近に控えた 2011 年３月 11 日、アメリカのテレビに流れた、あの津波が押し寄せる映像を今でもはっきりと覚えています。

今回の原稿作成にあたって、当時の写真や資料をいろいろと見返しました。当時の様々な気持ちが蘇ってきたのはもちろんのこと、同じ学校で過ごした３人の我が子の成長にもふれることができ、コロナ禍の今、自身を奮い起こす貴重な機会になりました。資料の中には、毎月、国際教育研究会、県教委、在籍校等に送っていた『ＮＪだより』がありました。その時々の思いをすなおに書き留めている記事から、特に思い出深いものを紹介します。

２．ＮＪだより

『初等部 47 人中等部 27 人でスタート！』　（2008 年４月）

ニュージャージー日本人学校は、アメリカ合衆国北東部、ニュージャージー州北東部、バーゲンカウンティー郡北西部の町、オークランドにある。校舎は、教会の施設を借りている。１年生から９年生までの 74 名が２階建ての校舎で一緒に生活している。体育館はなく、コナーズホールという昔の講堂を思わせる場所で式を行ったり、雨天時の体育を行ったりしている。運動場は、駐車場を下った場所にあり、手作りなのででこぼこで水はけも悪い。その上、グースがたくさん糞をしている。しかし、子ども達は、家に帰ると自由に外遊びができないようなので、この運動場でしっかりと友だちと遊ばせたい。

『カード＆チェック（小切手）生活』　（2008 年５月）

これまでの生活の中で、カードで物を買ったことなどほとんどなかった。当然のことながら小切手を切った経験など一度もない。さらにオンラインでの購入や支払い・・・。日本でも、当たり前のようにしている人はいるのだろうが、私にとってどれもが初体験であり、今でも不安がつきまとっている。小切手の仕組みは多少めんどうだが、実に合理的なのだろう。封筒の封を切るのに、前任校の先生からいただいた竹のペーパーナイフがとても役立っている。また、ファーストフード店でも、ちょっとした買い物でもカードを使っている。レシートにサインをすることがあるが、漢字で書いたサインを見て、「It is cool ！」といわれることがたまにある。店によっては無料で会員になり、会員価格で購入できる所もある。カードには、キーホルダーに付ける小型の物があるのがアメリカらしい？

『芝は大切』　（2008 年６月）

６月に入り、かなり暑い日が多くなった。といっても、日によって天気や気温の変化が大きく、肌寒い日もある。暑さにもいろいろあり、梅雨のような蒸し暑い日もあれば、湿気が少ないからっとした日もある。そして、店内の多くは、これでもかというくらい冷房がきいている。すぐに風邪をひいてしまいそうだが、今のところ、アメリカに来てから家族５人誰も体調を崩すことなく元気に過ごしている。

暑くなって気になっているのが、庭の芝への水やりである。アメリカは、芝に関してとても敏感なようで、特に前庭の芝を枯らすことは許されないらしい。芝刈りは業者がする契約になっているのでよいが、水やりをするのに相当な水の量が必要である。そして、スプリンクラーの場所を何回も移動している妻や息子たちは、とても大変だといっている・・・。

『プリンストンでピーチピッキング』　（2008 年８月）

ニュージャージーは、別名「ガーデン・ステート」と呼ばれ、トマトやコーンが州の特産物になっていて農園がたくさんある。学校でも、近くの農園に１～３年生が１学期にストロベリーピッキングに行き、２学期には初等部全体でパンプキンピッキングに行く。イチゴ、パンプキンの他にも、チェリー、ブラックベリー、メロン、リンゴなどのピッキングがある。モモ好きの我が家は、ちょっと遠出（車で約１時間半）して、有名大学のあるプリンストンにピーチピッキングに行ってきた。摘果をしないからなのか、モモもリンゴもとても小ぶりである。香りのよい黄桃だが、あまり甘くはなかった。ブルーベリーも摘んでジャムにした。帰りに、プリンストン大学に立ち寄った。超お金持ち大学の建物はさすがにすごかった。

『雪で休校 ＆ 恐るべしアメリカ』　（2008 年 12 月）

冬休み目前にした 19 日（金）は、雪のため休校になった。18 日（木）の夜に、学校のあるオークランドの教育委員会が休校を決定したことによる。朝起きた時には雪が降っていなかったので拍子抜けしたが、昼前に降り始めるとみるみる積もっていった。アメリカでは、雪かきをしなかったことが原因で、家の前の歩道で滑ってけがをした人がいたら訴えられてしまうらしい。そこで、早速雪かきを始めたが、隣の家の人が、除雪機を使ってあっという間に除雪してくれた。芝刈り機と除雪機は 1 家に 1 台必要かもしれない。そして、23 日（火）に 89 日間の２学期が終わった。子どもたちの冬休みの過ごし方は、日本に一時帰国したり、旅行にいったり、受験したりなど様々である。３学期は１月５日（月）から始まる。

車のタイヤはノーマルタイヤである。それで大丈夫だといわれていたが、今回の雪で心配になった。22 日（月）は、前日溶けた雪が、朝の冷え込み（－12℃）で凍結していた。確かに、家の前の道路は、ガチガチ、ツルツルになっていたが、大きな道路に出ると、車が走るスペースには、雪も氷も全くないのである。除雪車と塩カリの威力で、北海道旭川から来られている教頭先生もびっくりされていた。話は変わるが、20 日（土）に積もった雪はサラサラで、雪だるまも雪玉も作れなかった。まさに、パウダースノーである。少し気温が上がった日曜日には、雪も溶け気味で、雪だるまが簡単に作れた。山口県の雪である。その日、はしご車に乗ったサンタさんが、すごい音のサイレントをならしながら飴をまきに来てくれた。

『１年が終了しました！』　（2009 年３月）

３月３日（火）に初等部・中等部合同の第 15 回卒業式、13 日（木）に修了式が行われ、14 日（金）からちょっと長い春休みに入った。卒業式前日の２日（月）は、なんと積雪で休校になったが、当日はとても感動的な式を行うことができ、子どもたちの立派な態度に感心した。また、修了式に続いて行われた帰国される先生方とのお別れ式は、涙、涙、涙であった。特に、今年度担任にした４年生の子どもたちは、昨年度担任してくださった先生とお別れすることになり、式が終わってもしばらく泣き崩れていた上、なぜか通知表をもらってまた涙であった。子どもたちの中にも帰国する子がいて、来年度は７人でのスタートになりそうである。１年目に出会ったこの子たちのがんばる姿に、私の方が何度も励まされた。

『野球少年から学びました！』　（2009 年４月）

これまでにもお知らせした通り、子どもたちは今野球を楽しんでいる。13 人集まれば、打順は１番から 13 番まであり、守備も毎回かわって全員が出場する。そして、ピッチャーには、１試合と１週間の投球イニング制限がある。一番上の子のリーグはナイターで行われることがよくあり、電光掲示板、アナウンス付きである。その役を子どもたちがすることもあり、ハプニング続出である。スナックショップもオープンしていて、なんともアメリカといった感じである。そんな中、すてきな少年に出会った。その少年は、相手チームの子で最終回にピッチャーをしていた。しかし、ストライクが全く入らず、押し出しの連続で、試合は結局そのまま時間切れとなり終わった。帰り際、その子がたまたま出会った我が子に、「グッド・ジョブ！」と声をかけてきたのである。我が子が活躍していたわけではなかったので、かけられたその言葉にも驚いたが、全くへこんだ様子もなく、相手チームの初対面の我が子に気軽に声をかけてくる、底抜けに明るくポジティブな姿に感動した！

『マイケル・ジャクソン』　（2009 年７月）

マイケル・ジャクソンが亡くなってからずいぶんたったが、テレビでは、いまだに毎日のようにマイケル・ジャクソン関連のニュースが流れている。英語がさっぱり分からない私は、何を話しているのか分からないのだが、ジャクソン・ファイブの頃からの熱狂的なファンや、死亡理由に興味のある人達の関心に十分こたえるだけの話題がいくらでもあるのだろう。とにかくスーパースターだったということをあらためて実感する。スーパーマーケットに安価で大量に売り出されていたライブビデオ DVD を購入し、アポロシアターに行ってメッセージを書いてきた。

『消防車出動』　（2009 年９月）

朝、スクールバスが到着する前に非常ベルが鳴ったので避難した。しばらくすると、警察車両や消防車が到着した。日本人学校が借りている建物に隣接するナーサリー（幼稚園）側の装置が作動したようだが、結局誤作動だったようである。その間に、スクールバスや保護者の車が全て到着して思わぬ避難訓練となった。ちょうどこの日は訓練をする日であった。ここでは、月に１回必ず火災避難訓練をしなくてはいけない。先月は、雨漏りの修理が原因で非常ベルが鳴った。煙が出て焦げ臭い匂いもした。はしご車が３台来て、映画「バックドラフト」で見たような消防隊員が１時間以上念入りに調べていた。その時は、放課後のことで子どもたちがいなくてよかったが、もし放水されていたら後片付けが大変だったろう。

『初めての学習発表会』　（2009 年 10 月）

10 日（土）に学習発表会を行った。今年の初等部のミュージカル劇は、SMAP の「世界に一つだけの花」をテーマにして、「ブレーメンの音楽隊」のストーリーを NJ 校バージョンにしたものである。担任する１年生にとっては全てが初めてで大変なことも多かったが、各グループの上級生がよく世話をしてくれた。子どもたちもすぐにこの劇を気に入り、毎日練習を楽しみにして、休み時間も喜んで活動していた。今年は、背景や小道具も子どもたちの手で準備するなど、児童主体の活動を増やしたことで発表を成功させた喜びも大きかったようである。１年生から９年生までの全校音楽も、練習の成果を十分に発揮することができ楽しんで演奏していた。

『Happy Halloween!』　（2009 年 10 月）

31 日（木）は Halloween である。日本にいる時もハロウィンの行事を見聞きしたことはあったが、本場アメリカに来て一番驚いた行事になった。日本人学校でも、前日の 30 日（金）は仮装してくる子も多くいた。隣接する幼稚園（キンダーガーデン・ナーサリー）が毎年恒例の仮装パレードを始めたので、１年生の子どもたちと一緒に見に出た。みんなとってもかわいく、子どもたちに一番人気のマリオに仮装した子が通ると、「マリオ！」コールが自然とおこった。午後６時になると、隣接する（校舎を借りている）教会で“Halloween Party”が始まりとても賑わっていた。夜には、子どもたちが家の近くをいたずらしてまわるのだが、今年は天気が悪かったこともあり、昨年のような派手さがなかった。

『３回目の運動会が無事終了しました！』　（2010 年５月）

私にとってニュージャージー日本人学校で３回目の運動会が無事終了した。この通信の５月号は、３年間全て運動会についてお知らせしてきた。１年目はグラウンド作りから始まり、前日に雨が降ったので、朝早くから水抜きをしたり、グースの糞を片付けたりして大変だったことを思い出す。今年は、業者に依頼してトラックに土を広げたり固めたりした他、グースが来なかったこともあり、今までで一番よいコンディションで本番を迎えることができた。天気にも恵まれ、練習から本番まで予定通りに進めることができて本当によかった。一方、年度初めからの忙しさは相変わらずで、先生方が運動会への準備に専念できたのは前日という状態だった。先生方と子どもたちの底力を今年も実感した。

『家族旅行のような校外学習になりました！』　（2010 年６月）

生活科見学を実施した２週間後に移動教室を行った。1,2 年生はリバティー・サイエンスセンター、3,4 年生はアメリカ自然史博物館（映画「ナイト・オブ・ミュージアム」の舞台）5,6 年生はメトロポリタン美術館に行って来た。１年には我が子（三男）が在籍しており、生活科の学習など 1,2 年合同で行う時は、人数も少ないだけに正直やりにくいこともある。更に、今回の移動教室は、保護者ボランティアとして妻も参加することになり、ますますやりにくかった。リバティー・サイエンスセンターは、細菌、エネルギー、建築、コミュニケーションなどのたくさんのコーナーがあるのだが、その内容は 1,2 年生にとっては少し難しかった。しかし、体験コーナーや、ちょっとした動物園、水族館があり、子どもたちは十分に楽しんでいた。

『とてもすてきな体験になりました！』　（2010 年 11 月）

Thanksgiving Holiday(11/25-28)を利用して、車で３時間半南西に下った所にあるボルチモアに行って来た。ボルチモアといえば、今はオリオールズに上原選手が所属、昔はカル・リプケン選手が活躍し、そして、ベーブ・ルース選手が生まれた場所として有名である。その他にも、北アメリカ大陸鉄道発祥の地であり、アメリカ国歌の誕生の地でもあるらしい。

アメリカ国歌誕生の地であるマックヘンリー要塞に行ってみた。９時頃に着いたのでまだ他に観光客もなく、偶然９時 30 分から行われる国旗掲揚に居合わせたことで、その役をやらせてもらえた。その後、フィルム(1814 年９月 13 日イギリス軍との戦い)鑑賞をすると、最後にアメリカ国歌が流れ、カーテンが開き、目の前に私が掲揚した国旗が現れた。

３．おわりに

ニュージャージー日本人学校は、小中学校が同じ校舎で小中一貫教育や教科担任制を行っていました。私が現在勤務する周南市立鹿野小学校は、来年度から、隣接する中学校と同じ校舎で小中一貫独立校をスタートさせます。小中学校は、文化や教員の考え方が違うとよく言われますが、３年間一度も感じたことはありませんでした。また、全国各地から派遣されている教員や現地スタッフとの考え方の違い、多国籍、多人種が生活するアメリカ社会の差別についても、国や県、人種の違いによるものではなく、一人の人間としてのアイデンティティによるものだと実感しました。

私にとって３年間のアメリカ生活の中で一番心に残っていることは、“Ｅｎｊｏｙ！”という挨拶です。そして、この言葉と一緒に蘇ってくるのが、心底楽しんでいる底抜けに明るいアメリカ人の姿です。私はこの言葉から、「楽しさは人から与えられるものではなく自分の中にあるもの。自分が楽しめばまわりも楽しくなる。」ことを教えてもらいました。今でも自分に言い聞かせ、子どもたちに伝えています。コロナ禍の今、10 年前の生活を振り返り、心の底から“Ｅｎｊｏｙ！”できたことをとても嬉しく思っています。

学校だより「ＪＳＫＬ通信」送信メール文　～ 2018 年４月～2021 年３月 ～

下関市立垢田小学校　校長　神田　　哲
（平成 30 年度派遣　マレーシア　クアラルンプール日本人学校）

１．はじめに

クアラルンプール日本人学校では、毎月発行の学校だより「ＪＳＫＬ通信」作成は校長担当です。作成したものは、クアラルンプール日本人学校ホームページに掲載するとともに、日本国内のお世話になった方々へ送付していました。送付の際にメールに記した文章を読み返してみるとこの３年間の出来事がよく分かります。そこで、2018 年４月から 2021 年３月までの毎月のメール送付文章のうち、主な出来事を紹介します。

２．学校だより送信メール文

２０１８年４月

着任後３週間が経ちました。夫婦共にふうふう言いながらどうにか生活をしています。

校内は、小学部児童５５６名、中学部生徒１３２名、幼稚部園児９２名、計７８０名、オールＪＡＰＡＮの各都道府県から派遣された個性豊かな３、４０歳台の文部科学省派遣教員２４名、再任用のシニア派遣教員６名、大卒３年未満の海外子女教育財団派遣の若手教員の教員１７名、現地採用日本人教員３名、現地採用英会話講師１０名、イマージョンスイミングコーチ（英会話による水泳指導）３名、日本人事務スタッフ４名、現地事務スタッフ４名、メンテナンススタッフ１４名、幼稚部教員１０名による幼小中一貫校です。

校外の生活は、マレー系、中華系、インド系の人々がともに暮らし、イスラム教のモスクの隣にキリスト教会があり、英語とマレー語が行き交う多民族国家を身近に感じる毎日です。業務も生活も慌ただしいのですが、毎日がマレーシアンホットスパイスのように刺激的で、積極性、協調性・柔軟性が日々鍛えられています。

２０１８年６月

こちらは雨季で夕方１時間くらいスコールが来ます。日中は毎日が３０度以上ですが、湿度が低く影に入ると過ごしやすく感じます。

先月１７日から今月１４日までがラマダン（断食月）です。ムスリム（イスラム教信者）は日中は飲食はできません。水さえ飲めないので辛いのではないかと思います。英会話ティーチャーやメンテナンス（校務用務）スタッフ、ガード（警備）スタッフの半数近くがムスリムです。中学部生徒の３名がムスリムです。この生徒達は昼食時間は別室で自習をして過ごしています。私たちにとっては日頃と変わりませんが、気はつかいます。レストラン以外で食べ歩き、飲み歩きをしないようにしています。学校行事も運動会はラマダンを避けるようにしています。他のイスラム教の国ではラマダン時期が一

番テロが多い時期ですが、ここマレーシアは、イスラム教、ヒンズー教、仏教、キリスト教が混在する多民族国家で互いに許容するし共生する国民性で治安も良いため安心して生活をしています。

２０１８年１１月

着任してすぐに魅力あるＪＳＫＬづくりのための３つの柱を掲げました。「ＩＣＴ教育」「英語教育」「心の教育」です。それぞれにプロジェクトチームを編成し実施に向けて少しずつ取り組んでいます。その１つ「ＩＣＴ教育」での取組と悩みも含めてお伝えします。

文部科学省では、新学習指導要領の実施を見据え「２０１８年度以降の学校におけるＩＣＴ環境の整備方針」を取りまとめ、「教育のＩＣＴ化に向けた環境整備５か年計画（２０１８～２０２２年度）」を策定しています。それを受けて本校も早急にＩＣＴ化に向けて予算編成から対応する必要があります。国内では与えられた施設環境でしたが、教育委員会がない日本人学校は予算からスタートになることが、やり甲斐を感じながらも辛い仕事です。学習者用コンピュータとして必要な機能は？機種による学習の目的は？発達段階に応じた機種は？コンピュータリテラシーの計画は？特にキーボード使用の指導計画は？学校予算か個人購入か？設置台数と今後の展開は？様々な質問が学校運営理事会でありましたので、５月の理事会から毎月プレゼンしていました。やっとトライアル使用で７月にアイパット３５台購入することができました。今後は、早急に実施できること、来年度から実施できること、私の任期中に実施できること、長期にわたり計画していくこと等をまとめていく予定です。全体の方向性、全体像、全体の青写真を描きつつ、そこまでの道標、マイルストーンを学校内外に提示し、修正を加えながら全体像はブレることなくＩＣＴ教育、英語教育、心の教育を充実させていきたいと考えています。

２０１８年１２月

１１月は幼小中合同で、本年度から先行実施している「特別な教科　道徳科」の全校研究授業を行いました。「心の教育の充実」の具体的な取組の１つです。研究会の指導者は校長です。先月にもお知らせしましたように教育委員会がありませんので、良きも悪きもすべて自前です。今まででしたら教育委員会や教育センターに外部指導者の招聘をしていました。日本人学校は「ガラパゴス」になりがちです。学習指導要領改訂の時だからこそ、日本国内の教育の動向と文部科学省からの情報を教員、保護者、理事会、日本人コミュニティ等にわかりやすく発信することも校長の役割の１つです。学校の舵取りや教員の資質向上のための指導も当然校長の役割ですが、校長の私一人で良いのかという不安が大きくあります。教育委員会の指示指導、校長会の役割、近隣の校長同士の情報交換等

のありがたさを実感しています。

２０１９年４月

４月５日に新派遣者２３名を受け入れました。３年任期ですので１年に３分の１が帰国、派遣を毎年繰り返します。小中学部は、文部科学省派遣教員１２名、海外子女教育財団斡旋現地採用教員７名の１９名が新たに着任しました。９名は北海道から福岡県まで個性豊かな中堅教員です。退職後のシニア派遣が３名、若手教員が７名です。４名は幼稚部教員です。マレーシア生活も暑く刺激的ですが、職員室も雰囲気が変わり毎日が刺激的です。

生活面では１２月にアキレス腱断裂し、現地病院へ通院しました。海外でメスを入れての手術は抵抗があり保存療法にしました。また、３月末でコンドミニアム（マンション）を引っ越ししました。オーナーや不動産との交渉は英語です。私の聞く話す力ではとても交渉はできません。グーグル翻訳という立派なグーグル先生に教えてもらいながらメールによる英語でのやり取りで、どうにか希望のコンドミニアムに引っ越すことができました。時間ばかりかかり苦労の連続で、しなくても良い経験のようにも思いますが、このような経験も「現地理解」「現地体験」と研修の１つと思うようにして楽しんでいます。

２０１９年６月

マレーシアは今日でラマダンが終わります。明日から「ハリラヤプアサ」という祝日です。イスラム教のお正月です。先週の土日曜日は日本の年末のように日頃の休日より自動車の混雑が激しく人通りが多かったように思います。野菜、果物、食肉、魚を扱う食料品マーケット（下関では唐戸市場と青果市場を併せたような市場）も混雑していました。今日は日本で言うところの大晦日に当たります。現地校は先週末から日曜日までお休みです。会社も休んでいるところが多く今朝は日頃より交通量が少なかったように思いました。

中華正月（１月下旬チャイニーズニューイヤー）、ヒンズー正月（２月上旬タイプーサム）もお休みになります。多民族が融合して互いを尊重し合う国ですから、どの正月もお休みです。Ｎｅｗ Ｙｅａｒと併せて４回の正月があります。それぞれの民族の特徴が街の中のイルミネーショにも表れ興味ある行事になっています。ただ、１２月３１日も１月２日も現地校は登校でしたので、マレーシアで一番盛り上がらない正月はＮｅｗ Ｙｅａｒのように感じました。本日、お弁当を持って登校し勉強をしているのは日本人学校だけのように思います。日本人学校は「ハリラヤプアサ」の明日明後日２日間だけ休校です。

ラマダンが終わればイードと呼ばれる「断食明けの祝祭」です。「ハリラヤプアサ」には新しい服を着る習慣があるようです。それで、ラマダン中は街ではイスラム

系の服をバーゲンしていました。また、「オープンハウス」と言って誰でも家の中に招待して食事やおやつを振る舞う習慣があります。知らない人でもどのような宗教の人でもだれでも訪れて構いません。ムスリムの習慣ですからお酒はありません。イードは祝祭と同時にテロの危険性が高まる期間ではあるので、危機管理は必要ですが、ムスリムの方々の習慣に触れる良い期間です。

２０１９年７月

本校の正式名称、在マレーシア日本国大使館附属クアラルンプール日本人会日本人学校で示されているように大使館附属で日本人会所有のマレーシア教育省から認可されている私立学校です。学校代表は大使館「公使」、学校運営理事会理事長は日本人会副理事長の学校担当が務めることになっています。理事は大使館から２名（文部科学省派遣１等書記官、外務省領事部長）、日本人会から４名、マレーシア日本人商工会議所【ＪＡＣＴＩＭ】から２名、学校教職員（校長・教頭・事務局長）３名、ＰＴＡ会長１名の計 １２名です。日本人会、ＪＡＣＴＩＭからの派遣された理事は全て現役の役職駐在員です。学校経営の母体であるとともに学校教育の一番のサポート役でもあります。教育委員会も校長会もありませんので、私の一番の相談相手は、学校代表、理事長、文部科学省派遣１等書記官、領事部長です。理事の皆様はクアラルンプールでの大使館、企業の貢献活動とはいえ、本当にボランティアで学校を助けていただいています。

先週土曜日、日本人会総会がありました。クアラルンプール日本人会は、法人会員３１８社、個人会員約２，２００世帯、４，８００名の組織です。日本人会理事会の理事も全て現役の役職駐在員のボランティアです。正式名称のように日本人会の関連組織ですから園児児童生徒の入学条件に保護者の日本人会会員があります。教員も全員日本人会会員です。総会での２０１８年度事業報告の中に学校担当として本校理事長が、本校の学校教育面と財務会計面の経営方針と経営状況を説明しました。学校経営の状態が学校関係者のみならず日本人会を通して、クアラルンプール日本人コミュニティにも周知されます。総会に出席し、説明を聞きながら、来年２０２０年度の総会では「学校経営　３か年計画の進捗状況」、再来年２０２１年度の総会では「学校経営３か年計画の成果と課題」を理事長が説明できるよう毎月の学校運営理事会で学校経営の取組と進捗状況をまとめ、伝える必要があると、身の引き締まる思いがしました。

総会での学校運営理事会理事長の所感を引用します。

『昨年は神田校長が打ち出された学校経営３か年計画の中でも特にＩＣＴ教育の実行計画について 時間を掛けて協議した。本年は同計画の２年目に当たり、英語教育、心の教育を含めた３つの取り組みが加速される。学校運営理事会としても積極的に関与していきたい。また本年は学校運営の各種仕組みを再整備し、ガバナンスを強化する重要

な年となる。まずは再整備を要する点を洗い出し、必要に応じて専門家のご意見も伺いながら、長期的観点から多面的に検討を進めていきたい。』

令和元年度　第４３回　東アジア・大洋州地区日本人学校　校長研究協議会
令和元年度９月５・６日　クアラルンプール日本人学校

２０１９年１０月

９月５日（木）６日（金）に第４３回東アジア・大洋州地区日本人学校校長研究協議会及び校長配偶者研修会が行われました。校長会は毎年１回実施されます。世界中の日本人学校の校長会地区割りは「東アジア・大洋州」「中南米」「南西アジア・中東・アフリカ」「北米・欧州」です。クアラルンプール日本人学校は「東アジア・大洋州校長研究協議会」に属しています。年に１回「東アジア・大洋州日本人学校」３９校の校長、校長配偶者が集まります。東アジアは全世界の学校数の半数、児童生徒数の８割以上が在籍しています。４地区でも最大規模の校長会です。校長会長校が会場となります。昨年度はオーストラリア・パース日本人学校、本年度はクアラルンプール日本人学校が会場校でした。東アジア・大洋州地区３９校中の日本人学校のうち３７名の校長、２３名の校長配偶者が出席しました。また、外務省、大使館、文部科学省、海外子女教育振興財団、全国海外子女教育国際理解教育研究協議会の来賓、クアラルンプール日本人会、学校運営理事会関係の方々をお招きしました。関係機関からの指示指導、課題別研修、規模別研修を行いました。校長配偶者研修会も併せて行われ、各校の派遣教員配偶者会の実態と課題、課題解決に向けての取組について情報交換をしました。校長研究協議会と言っても年に１度しか集まりませんし、日頃はメールでのやりとりしかない校長会です。ほとんどの準備は校長会長１人が行います。協議会内容、日程調整等ほぼ１年をかけて準備をしてきました。準備の最後の仕上げのために８月末は休日出勤しました。校長配偶者研修会の準備もありますので、妻も校長室で細かな事務処理作業をしていました。夫婦で業務を協働することは国内ではありませんので良い経験をさせていただいていると思うようにしています。

２０２０年３月

マレーシアは３月中旬からのオーバーシュートは収束する気配がありません。１８日

から始まった行動制限令は４月１４日目で継続されることになりました。行動制限令には「外国人の入国禁止」が含まれていますので、４月７日に予定していた文部科学省派遣教員の赴任は中止となり、現在も赴任の見通しは立っていません。２２日に始業式を予定していますが、どうのようになるか分からない状況です。

私自身は妻共々感染していないように思います。エレベーターを降りて玄関前にはアルコール消毒を置いています。外出は食品、生活必需品の買い物だけです。長期に渡る自宅待機はつらいものがありますが、とにかく感染予防行動しかないと思います。

２０２０年１０月

マレー半島には戦前までに至るところに日本人街がありました。日本人街には併せて日本人墓地も作られています。クアラルンプールにも日本人街がありました。邦人互助組織、日本人会が結成されたのは１８９４年明治２７年です。そして総計５７０名が眠る日本人墓地があります。本校は教員、小学部５、６年生の児童、中学部生徒が土曜日のボランティア活動で年に３回の清掃活動をしています。また、日本人会では春秋には日本より和尚様を招聘して彼岸法要を行っています。常夏のマレーシアですが季節を感じる行事の一つです。今年はコロナ禍により残念ながら彼岸法要は中止となりました。私たちの墓地清掃も活動制限により実施延期になっていましたが、今週土曜日に第１回目の墓地清掃を行うことができます。日本の秋分の日を思い出し、２０１８年に建立された慰霊碑の背面に書かれている「先人を偲び、平和への思いを込めて」を胸に抱きながら、子どもたちと墓地清掃をさせていただきます。

２０２１年１月

本日１月８日３学期始業式よりやっと学校再開することができました。１０月１２日から約３ヶ月ぶりの再開です。１０月からオンライン授業第Ⅱ期と位置づけ実践をしてきました。再度休校となった１０月末に赴任した令和２年度派遣教員もオンライン授業の画面を通してではなく、初めて子ども達と対面で出会いました。

今回の学校再開の経緯です。年末に在マレーシア日本国大使館公使を中心としてアメリカ、オーストラリア、フランス、ドイツの各大使館連盟で各国の民族学校の再開を要望する書簡がマレーシア教育省へ提出されました。年が明けて２日に「学校再開に問題なし、ＪＳＫＬ始業式の８日再開が可能か再度教育省へ確認すること」との回答を公使よりいただきました。３日に教育省担当官から「８日再開可能」との連絡を受けました。マレーシア公立学校よりも早く学校再会することができました。任国に滞在する大使館をはじめとする邦人コミュニティの方々の御支援があってこその日本人学校であると感じています。喜びもつかの間、１月末には再度休校になりました。

２０２１年３月

３月５日には行動制限令は解除される予定です。また、教育省から３月８日より学校再開の通達が来ました。１２日が修了式ですので５日の登校ですが貴重な５日間となります。今日のオンライン授業の中でも何度も何度も「８日から本当に学校に行けるの？」と聞く児童がどの学級にもいたとのことです。子どもたちも登校を心待ちにしています。

１０日は小学部卒業証書授与式です。学校再開後の卒業式ですので体育館で実施ができそうです。ただし人数制限のため、学級ごとの式、保護者はオンライン参観にする予定です。また、他学年は貴重な５日間のうちの１日です。６年生の卒業式と並行して他学年は通常授業を行います。６年生も卒業式後も弁当を食べて午後下校にする予定です。翌日も自由登校日とします。やっと登校できる貴重な５日間を特別な時間として学校生活を過ごさせたいと思います。

文部科学省から、４月６日に予定にしていた令和３年度派遣教員派遣日の延期の連絡が来ました。想定はしておりましたが、後任校長を含め１２名の新規派遣教員が赴任しない中での新学期となります。私の任期も残り２週間となりました。様々な状況を想定して、できる限り来年度の準備をしておきたいと思います。

３　おわりに

幼小中一貫校、学校運営理事会、マレーシアの私立学校、全国から集まる個性豊かな文部科学省派遣教員、学校採用教員の募集から面接・採用活動、授業料設定から予算編成・予算執行、教材備品輸入購入等々、ダイナミックに学校経営することを経験させていただきました。そして、「人」「もの」「こと」「金」「情報」を集めることと生かすことが校長の役割であることを実感することできました。

また、小学校教員である私は、小中一貫校である日本人学校での中学校長は大変貴重な体験でした。中学校教員のチーム対応、話し合いの進め方、生徒指導体制づくり、生徒会活動、同好会活動（部活動）等中学部には小学校とは違う文化がありました。

３年間の具体的な取組は、赴任した４月に掲げた中期目標「魅力あるＪＳＫＬづくりのための３本柱３カ年計画」により、学校運営理事会の協力を得ながら進めた「ＩＣＴ教育の充実」「英語教育の充実」「心の教育の充実」です。

思い残すことはたくさんあるのですが、３年間の派遣期間を微力ながらやりきったと感じながら、２０２１年３月１３日コロナ禍の中、帰国の途につきました。

コロナ禍により、人気がなく日本人学校帰国教員の声だけが響いたクアラルンプール国際空港の出発ロビー、成田国際空港での厳しい入国審査とＰＣＲ検査、東京都内での２週間の宿泊施設待機の体験は派遣最後の思い出になりました。

蘇州だより

下関市立王喜小学校　教諭　櫻井　紀邦
（令和２年度派遣　中華人民共和国　蘇州日本人学校）

コロナウイルス感染拡大の影響を大きく受けた令和２年度派遣組でした。１２月に派遣先が決まった後に、武漢のコロナに関するニュースが報じられるようになりました。それでも、３月末の派遣は予定通り行うとの通知があり、準備を進めていたところ、３月末に急遽派遣延期となり、結局渡航したのは半年後の９月２７日でした。初出勤はさらに一か月の隔離後でしたので、この原稿を書いている１２月末時点では、実際に働き始めてから１年と２か月しか経っていません。蘇州に来てからも、コロナの影響は少なくなく、学校行事等が大きく制限されました。児童生徒にとってもまた教員としても、日本人学校ならではの魅力の一つとして、現地との交流があります。遠足や街探検はもちろん、社会見学や修学旅行も現地ならではの体験ができます。蘇州では、現地校との交流も盛んです。教員の研修としても、中国の現地校の授業を参観し、中国の先生と意見交換をする研修もあります。それらが、軒並み中止となりました。もちろん、こうした機会が失われたのは残念ですが、一方で日々の授業の大切さを再認識する機会ともなっています。行事がないから学校がつまらないではなく、授業が面白いと子どもたちに感じさせたい。そう思い、腰を据えて取り組むことができました。教員としての原点に立ち戻るようなよい機会となったと捉えています。

蘇州で普通に生活してる分には、ほぼいつも通りの生活ができます。ショッピングセンターや地下鉄の入り口でスマホに表示される健康コードやワクチンの接種証明、行動履歴等を示せばよいのです。しかし、蘇州市の外に出たり、江蘇省の外に出たりすることには、しばしば制限がかかります。それも突然に。市外や省外に出た時に制限がかかって帰れなくなると面倒なので、私は蘇州市からほとんど出たことがありません。専ら蘇州の中を散歩しています。コロナの前は、中国からの航空運賃が格安なこともあり、長期休みには世界中に海外旅行をされる先生方が多かったと聞いていますが、遠い昔の話のように聞こえます。

蘇州は、いいところです。気候も比較的穏やかで、人の気質も大らかです。食べ物の味付けもマイルドです。街の治安もよく、経済的にも社会的にも恵まれた人たちが多く集まっているところだと聞きます。生活も至極便利です。スマホ一つあれば、何でもできます。買い物も、出前もスマホで頼めば、送料無料ですぐに部屋まで届きます。

少々困っていることもあります。大気汚染と食べ物です。もともとハウスダストや花粉等に反応しやすい体質ということもあったのでしょう、PM2.5の数値がよくない日には、鼻やのど、肌の調子が思わしくありません。自宅の空気清浄機は、３６５日２４時間、フル稼働しています。食べ物はおいしいのですが、半年ほど経った時に、原因不明の腹痛に襲われ、その後は油を使った料理がどうにも苦手になってしまいました。中華料理は油を使うのが基本ですので、なかなか現地の料理を楽しむことが難しくなっています。

蘇州の旧市街　運河が多い街です

残すところ後１年と少し。蘇州日本人学校と子ども達のために、最後までがんばろうと思っています。

No.5

蘇州だより

蘇州日本人学校
教諭　櫻井　紀邦
令和３年５月１日

蘇州の春

蘇州は、長江の河口に近い場所です。気候は温暖で、この冬は一度も雪が降りませんでした。とはいえ、大陸からの寒気が来たときは、零下１０度になった日もありましたが、それも数日でした。蘇州には山口県より少し早めに春が来て、３月中に桜はほぼ散ってしまいました。

街には、梅や桃、桜、木蓮などがあちこちに植えられていて、よく見かけました。花が咲いて初めて、街にこんなにたくさんあったんだ！と気づきました。ただ、桜は少し日本と品種が違うのでしょう、花びらが小さめであったり、葉が先に出てその後に花が咲いたりしています。それはそれで微妙な異国情緒を感じ、いいものです。ソメイヨシノも数は少ないですが、見かけます。桜も多いですが、日本よりも梅や桃が植わっている率がかなり高いようです。中国の方たちの好みが分かる気がしています。個人的に好きなのは、運河沿いの柳です。とにかく柳がたくさん植えられているのですが、運河に映える新緑の緑がなかなかよいのです。

そうそう、中国ではスギの花粉症がありません。そもそも杉があまり植わっていないそうで、花粉が飛んでいないようです。私も春先はいつも大変な思いをしていましたが、この春は花粉症の症状は全く出ていません。

大気汚染

花粉症がないのはよいのですが、閉口しているのが大気汚染です。つまり、PM2.5です。私は、アレルギー体質で気管支系が弱いこともあり、すぐにのどが痛くなったり、肌が荒れたりします。外に出なくても、マンションの窓から街を一見すれば、今日の大気の状態がほぼ分かります。大気の状態がよくない日は、遠くのビルが霞んでいてよく見えません。どうしても出不精になりがちです。

毎日、大気汚染の状況をリアルタイムでスマホで確認するのが日課です。「普通」「よい」と判定されていても、その数値は日本の基準では運動会中止レベルです。自宅のマンションの窓は、基本閉めていて、２４時間空気清浄機を稼働させています。大気の状態がいい時に換気をしています。洗濯物は、室内に干しています。乾燥しているので、一晩で乾いてしまいます。ホテルの部屋が乾燥しているのと同じですね。

学校では、大気汚染に対して、難しい対応が必要となります。大気の状態がよくないからと言って、運動場での体育や昼休みの外遊びを制限してしまうと、子どもたちの体つくりに影響します。日本の基準を当てはめていたら、小・中の９年間で外で体を動かす日は数えるほどしかなくなってしまいます。実際、学力テストの数値はかなり高いものの、体力テストの数値は「あらら…」という蘇州日本人学校です。独自の基準を設け、外に出る時間を調整し、日々大気の状態をリアルタイムでチェックしながらなるべく子どもたちの運動量を確保する努力を続けています。昼休み直前に、大気の状態が若干改善し、「今日の昼休みは運動場で遊んでいいです」という放送が流れた時には、子どもたちから歓声が上がります。晴れた日には外に出て、運動場で遊べる。今までは、当たり前のように思っていましたが、実は有り難いことなのかもしれません。

No.6

蘇州だより

蘇州日本人学校
教諭　櫻井　紀邦
令和３年６月１９日

蘇州にも梅雨があります。天気予報を見ていると、日本にかかっている梅雨前線と同じ雲が蘇州にもかかっていることが分かり、意外と近いんだなと思ったり、雲の大きさ（長さ）に驚いたり。蒸し暑さは日本と同じで、気温は蘇州の方が高いです。

歩いていると（蘇州交通事情）

蘇州日本人学校では、車の所有は許可されていません。いや、例え車に乗っていいよと言われても、私は絶対乗りません！それぐらい、中国で運転するのは勇気がいると感じています。基本、通勤をはじめとして移動は歩きです。そこで、歩いていて日頃感じているちょっと日本と違う蘇州交通事情をご紹介します。

①車は右側通行

これが、いつまでたっても慣れません。道路を渡るとき、車やバイクは、右から来ると長年の生活で身体に染みついています。「右、左、右」を確認することを交通教室でも教わります。ところが！自分の目の前を左から突然車が来るのです。元気な時はいいのですが、疲れて帰宅する時や、考え事をしているときは…。何度かハッとした時がありました。

②車は常時右折可

中国では、赤信号になっても、右折する車は「常時右折可」です。日本の感覚で言うと、「常時左折可」ですね。これを歩行者の私からすると、青信号の横断歩道を渡っていると、一時停止なしでスピードを落とさない右折車が目の前を通り過ぎていくということになります。これも左から来るので、日本の感覚でぼけっと渡っているとヒヤッとします。せめて一時停止ぐらいしてよね！そんな強引に歩行者の前を通らないで！内輪差分かってる？靴を踏みそうだよ？と運転手に突っ込みたくなります。

③信号が変わる前から

交差点で、中国の方は歩道で待ちません。まだ青信号になっていないのに、車道に一歩、二歩とどんどん出て行きます。大人も、小さい子供の手を引いているお母さんでも、みんなそうです。車道に出ているので、その前後を電動バイクがすり抜けていきます。見ていて、冷や冷やします。強者は、青信号になる前に、ついに渡り切ってしまうことも。いつの間にか青信号まで歩道の上で待っているのは私ぐらい？です。

④歩道はまっすぐ歩く

私の住んでいる周りは、道がよく整備されていて、歩道が広いです。安全なはずの歩道ですが、そうでもなく…。私が心がけていること。歩道でわずかでも斜めに歩いたり、方向を変えたりするときは、必ず後ろを振り返ります。なぜだか分かりますか？後ろから猛スピードで自分の側をすり抜けていく電動バイクがいるからです！電動バイクは、ほぼ無音です。バイク専用の側道があるのだから、そこを走ってよ！歩道を我が物顔で走らんで！と思いますが、これが現実。歩道で電動バイクに引っ掛けられることが最も身近な交通事故の危険じゃないかな？と思っています。

No.7

蘇州だより

蘇州日本人学校
教諭　櫻井　紀邦
令和３年８月２２日

蘇州日本人学校では、２４日から２学期が始まります。しかし、コロナの影響で子どもたちが登校するのは９月１日に延期になりました。それまでの１週間は、オンライン授業で対応することになり、準備をしているところです。

中国語

来月で渡航してから１年になりますが、中国語はさっぱりです。それもそのはず、朝起きてから夜寝るまで、ほぼ１００％日本語を使っています。お店で買い物をするときも、電子決済で店員と話すことはありませんし、中国語を話す機会が本当にない毎日です。週１回、細々と中国語のレッスンを受けてはいますが、少し理屈は分かっても、やっぱり使わないとダメですね…。

何しろ、中国語は、発音が難しい！英語は、カタカナ英語でもある程度通じるところがありますが、中国語はカタカナの発音ではホントに全然通じません。同じ発音でも、４種類の声調があり、それを使い分けないと全く違う意味になります。微妙な発音や声調をあんなに早口で本当に使い分けてるの？聞き分けてるの？と不思議でなりません。お手上げ状態の私です。

それと…。勇気をもって中国語を使った時の中国の方々の反応が、純日本人の私たちには結構心が痛い時がありまして…。伝わらない時や、発音が変な時、店員さんにも思い切り馬鹿にされたように笑われます。これがいたたまれないんですよね…。しかし、これは日本人の受け止め方というもので、中国ではごく普通のことのようです。中国の文化の影響を強く受けている家庭環境の子どもは、確かにそういう反応を教室でもします。失敗した子や、間違った子に対して、遠慮なく笑います。しかし、悪意はなく、明るくカラっとしています。私もようやくその辺りが分かってきたところです。どちらが正しいとか、そんな話じゃないんですよね。ただ、やっぱり自分は慣れないなあ…と思いつつ。

中国語にも方言があります。バスに乗っていると、停留所等の案内が２か国語で流れているようなのです。どちらも聞き取れないので、謎だったのですが、現地生活が長い方に聞いてみて判明しました。中国語と蘇州語だそうです。おじいちゃんやおばあちゃんは、今でも蘇州語しか分からないという方も多いそうです。

中国の子どもたちも大変

中国の子どもたちは、よく勉強します。それもそのはず、試験の結果で人生がほぼ決まってしまうからです。その厳しさやプレッシャーは日本の比ではないなと感じています。最近知ったのですが、中国の中学校・高校では、校則で「恋愛禁止」となっているのが普通だそうです。勉強の妨げとなるからです。そういえば、中学生・高校生のカップルを街で見かけたことがありません。その反動かどうかは分かりませんが、大人のカップルのイチャイチャ度と言いますか、密着度は日本の常識をかなり超えたレベルで、信号待ちの時に目の前でされると何だかこっちが恥ずかしくなってしまうほどです。

中国の学校の先生も大変そうです。毎日帰りも遅くなると聞いています。ただ、学校の先生の権威は強く、先生の社会的地位や給与も日本よりもかなり高いようです。「学校の先生はエリート」という認識のようです。儒教的な価値観とも相まって、先生に対する敬意もあります。日本人学校にいても、それは強く感じます。

No.8

蘇州だより

蘇州日本人学校
教諭　櫻井　紀邦
令和3年12月11日

蘇州日本人学校は、春の訪れが早いです。赴任・帰任にある程度の日数が必要ですので、3学期の終業式は3月9日です。通知表や指導要録の提出期限は、2月中となります。加えて、中国は2月の初めに春節（旧正月）の大型連休がありますので、3学期はさらに短くなり、あっという間です。そんな事情もあり、蘇州日本人学校では、来年度より前後期制を採用する予定です。以前より私自身も関心を持っていた前後期制を体験できることを、楽しみにしています。

ICT 機器の活用

私は、中国に渡航する前の年にスマホデビューしたスマホ初心者です。パソコンは使い慣れているのでいいのですが、スマホやらタブレットやらは感覚的に使い慣れておらず、今でも若い先生方に手取り足取り教えてもらう毎日です。日本から持参した格安スマホでは、中国の必須アプリに対応できず、こちらでスマホを入手しましたが、設定は全て若い先生にやってもらう始末です。そんな私ですが、若い先生方に教えてもらいながら、授業で ICT 機器を使おうと奮闘中です。教えてもらって「よし、大丈夫そうだ」と授業をしても、「あれ？どうやるのかな？」ともたもたする時もよくあります。そんな時は、「先生、こうやるんだよ！」と子どもたちが教えてくれたりして、何とかなっています。使い始めてみると、ICT 機器のよさも少し分かってきた気がします。最近は、この学習には使えるな、この学習はノートと鉛筆がやはりいいなと見えてくることがあり、目的によって使い分けしていくことが必要だなと思っています。

蘇州日本人学校では、5年生と6年生、中学生は一人一台 iPad を使っています。1～4年生は、共用の iPad を予約して使うシステムです。台数は十分にあり、また情報担当の先生が ICT 機器に堪能な方なので、何かトラブルがあってもすぐに対応していただけるので、安心して使うことができています。情報担当の先生だけではなく、先生方みなさんが ICT 機器の扱いにご堪能で、驚かされます。

すごいなと思っているのは、蘇州日本人学校にはパソコンや Wi-Fi、ICT 機器の専門家の方がいらっしゃることです。中国の方で、日本語は話せないのですが、事務局を通じて不具合を伝えておくと、翌日には教室のビッグパッドの不調も直っています。サーバや Wi-Fi の不調もすぐに直ります。教員は、機器の設定や不具合などを心配することなく、授業での活用のみを考えたらよい環境が整っていることに感謝です。

私は今年度研究主任をしていることもあり、先生方の授業を見に行ったり、ICT 機器をどのように活用するのか考えたりする機会が多くあります。今年度から学校教育目標が「コミュニケーション力の向上」となり、学習行動目標として「相手に伝わるように話すことができる」を掲げています。研修の柱は、「対話的な学び」に焦点化して進めていますが、コミュニケーションの一つのツールとして iPad をはじめとする ICT 機器の活用も研修しています。ICT 機器を単に学習指導に効果的だからと捉えるだけではなく、学習行動目標や研究主題に迫るためにどう活用するかを考えていくことが大切だなと考えています。中学生は、世界各地の日本人学校やユネスコとつないで、「SDGs 世界同時授業」を行っています。生徒のコミュニケーション能力と先生方のお力に驚くばかりです。ゴールとなる中学生の姿を間近に見ることで、そこに至るまでに小学生のうちに何をしなくてはいけないかを具体的にイメージすることができ、刺激になっています。

とはいえ…。今日もスマホの使い方が分からず、困っている私です…。

No.9

蘇州だより

蘇州日本人学校
教諭　櫻井　紀邦
令和４年１月３１日

今、この蘇州だよりを書いている１月３１日は中国では、大晦日。日本人学校も春節休みに入りました。１週間まるまるお休みです。ラッキー！と思いつつ、その分どこかの土曜日や日曜日にちらほらと登校日が設定されてはいます…。日本人学校にお勤めされている中国の方からは、春節が近づいてくると、うきうきされているのがとってもわかりやすく伝わってきます。ただ、今年は帰省を控える方が多いようで、ガラガラになるはずの蘇州市内は、人と車がそんなに減っていません。実家に帰る代わりに、ショッピングや映画等を楽しんでいるようです。

予算

日本人学校は、私立学校です。学校の収入は、多少の寄付金や国からの補助金はあるものの、大部分は授業料です。まずは来年度予算の要望を各担当より出し、企画委員会、職員会議、もう一度企画委員会、そして企業の方々から成る運営委員会を通って、来年度の予算が成立します。初年度は、予算での話し合いが何のことがよく分からず、ちんぷんかんぷんでしたが、ようやく少し分かってきました。優先順位をつけるにも、新たな取組に予算をつけるにも、削減するにも、理由が要ります。日本では、学校のお金のことについてこれほどシビアに考えたことは正直なかったので、学校を運営するためにこういうお金が必要なんだと目から鱗が落ちる思いをしたことも何度もあります。また、予算を立てることを通して、「何のために」教育を行っていくのか根本から考えることに立ち返ることもありました。日本人学校ならではの体験だなと感じています。

グラウンド改修

３学期は、グラウンドが全面閉鎖されています。今の場所に蘇州日本人学校が移動してから１０年以上経ち、人工芝もへたってきて、遊具の安全性にも不安が出てきたためです。面白いのは、登り棒や鉄棒一つにしても、「当たり前」が日本と中国で異なることです。細かいところまで確認しないと、出来上がってびっくり！になりかねません。また、業者さんからの提案が期待できません。日本の業者さんでしたら、いくつかの学校で遊具等の施行を手掛けたことがあり、「こういうのはいかがでしょうか」「このようにしたらよいのでは」とプロからの提案をいただけると思いますが、中国ではそうはいきません。何しろ日本の教育に適したモノを手掛けたことがないんですから、それは当然です。こちらからあれこれ主張し、問い合わせて確認しないといけません。こうしたところも異文化体験の一つだなと思っています。

子ども達は、外で遊べないため、少々ストレスがたまりがちです。通常の学校より広い廊下やホール等を利用して、割り当てを決めて何とか運動できる環境を整えようとはしています。ただ、よく考えたら昨年度運動場が使えた時も、冬は大気汚染がひどいため、３学期に外で遊べたのは本当に数えるほどしかありませんでした。私は今２年生を担任していますが、あやとりやコマやけん玉等を休み時間に触れるようにして、子ども達の楽しみの一つとなるようにしています。

名物の上海蟹です。

ドイツから日本の伝統文化を思う

シニア派遣　教諭　藤本　浩行
（令和３年度派遣　ドイツ　デュッセルドルフ日本人学校）

１．４つの節目の年に立ち合い、新たなスタート

「他国文化にふれることは、自国文化の見直しにつながる」

この言葉は、昭和の終わりに国際理解教育の研究指定校に勤務していた時に、ご自身が在外教育施設で勤務経験のある指導者のＮ氏から聞き、心に響き続けている言葉です。教職人生のいつの日か在外教育施設で教鞭を執ることが夢でした。

第１の節目は還暦にシニア派遣教員として、夢を実現することができました。デュッセルドルフ日本人学校の中学部で地理、歴史、公民の授業を担当することに加え、小学部で書写も教えることになりました。今まで、小学校の実践経験しかないものの、小中連携教育やコミュニティ・スクールを推進してきた私にとっては、中学校での実践ができるので期待が膨らみました。

第２の節目は、赴任した年が日独友好１６０周年という記念すべき年でした。１６０年前といえば、日本がアメリカを始め諸外国と結んだ通商条約をドイツ（当時はプロイセン）とも結んでいたのです。歴史の教科書をていねいに読んでいくと、日本とドイツの関係がかなり記載されていました。

日本デーのしの笛、太鼓の演奏

第３の節目は、赴任したデュッセルドルフ日本人学校が開校５０周年の記念すべき年であったことです。数年前から式典に向けた準備が進められて、赴任した私たちもそれぞれの部会に分かれ、今までの資料や写真などを調べながら記念式典に向けての作業をしてきました。開校当時は、現地校の教室を間借りしてのスタートであったということです。当時のことを調べる中で、今までデュッセルドルフ日本人学校に携わってこられた方々の熱い思いが伝わってきました。

第４の節目は、デュッセルドルフ日本人学校と交流している現地のツッーリエン・ギムナジウムとの姉妹校提携４０周年という記念すべき年であったということです。海外での日本人学校が現地の人々に受け入れられるには、現地の学校との交流が欠かせません。デュッセルドルフ日本人学校が開校当初から、様々なかたちで現地校との交流を模索し、姉妹校としての強い絆で交流を続けてきたのは、諸先輩方の並々ならぬ努力の結晶であったことで頭の下がる思いです。

私は、今までの教職人生の中で、「地域は大きな学校」というテーマを掲げ、教材や人材を地域に求め、本物の教育を模索してきました。現地校との交流ができることは、今まで実践してきたことが、海外での日本人学校でも通用することを示す絶好の機会でもあり、夢が広がってきました。

実際にコロナ禍の中でも、オンラインでの交流や、図画工作や美術の作品交流が行われていました。先の姉妹校提携４０周年の式典は１１月２６日に実施されましたが、今までの固定概念をくつがえすようなものでした。司会進行はおらず、いきなり音楽演奏で始まり、両校の代表の子どものスピーチ、両校の校長が登壇してのコラボでのスピーチ、両校生徒の有志による「Cup Song」の発表などがありました。コロナ禍であったので、チョコレートで乾杯などの粋な計らいもありました。最後は、参加者と共に、折り紙で鶴や船などを折って、それらを美術担当の教員が玄関の壁面にアート作品として仕上げるというものでした。約２時間の記念式典でしたが、まるで芸術作品にふれているようなものでした。

Ce 校姉妹校提携４０周年式典で「Cup Song」披露

このような充実した現地校との交流式典を行うことができたのも、歴代日本人学校教職員の努力の賜物であると本当に感謝しています。

以上の４つの節目に立ち会えることができた幸運により、今後デュッセルドルフ日本人学校でどのような教育実践を進めていけばよいのか考えるきっかけとなり、私自身のシニア教員としての新たな第一歩となったものでした。

２．ドイツ科と社会科公民とのコラボ授業

ドイツ語科のＦ先生より、「ドイツ連邦議会の見学に向けて、ドイツ理解教育の学習を一緒にしませんか」というお誘いがありました。中学部３年の公民科で政治の学習を予定していたことや、タイムリーにも、日本とドイツでも国政選挙があったのでまたとないものでした。テーマを「ドイツ州議会の見学に行こう」として、ドイツ語科と社会科のコラボ授業を行うことになりました。ドイツ連邦共和国は、ナチス政権のような時代を二度と到来させないために各州で独立した政策が採用されていることがわかりました。義務教育の修業年限も州によって違っていることや、ドイツの選挙制度、政党の歴史的な成立を日本と比べながら学ぶことができました。

中学部３年生による州議会の見学

当初は、新型コロナ感染防止からオンラインでの見学でしたが、感染者が減少傾向になったこともあり、実際にノルトライン=ヴェストファーレ州の州議会を見学することができました。

見学の翌日に新首相が指名されるということで、予定されていた議場に降りることはできませんでしたが、観覧席で、生徒全員が議員になったつもりで、事前に課題としていた「デュッセルドルフの生活をよりよくする政策案」を発表することができました。

生徒たちが発表した課題の一部は、以下のようなものでした。「ドイツの街灯は、暗くて

夜に塾から帰宅するときは危ない」「道端にビールのガラス瓶がよく落ちているので危ない」「公衆トイレの数が少ない。しかもお金がいるので無料にしてほしい」「ドイツの自然災害への対策が必要」（実際、夏に５０年に一度という自然災害が起きたということを受けての提案でした）

これらの提案は、単元のまとめのパフォーマンス課題としてレポートを作成させました。州議会の見学でお世話になった方にも、ドイツ語の担当の教員が生徒たちの作品を訳してくださり、お礼として届けました。

ドイツの選挙投票率が日本と比べてかなり高いこと、特に若者の投票率が高いことの理由を様々な観点から追求していく契機となりました。

３．美術科と社会科公民とのコラボ授業

美術科のＫ先生から「『オモシロガラ』という作品展が開催されるので、デュッセルドルフ日本人学校の卒業生でもあるM氏からのお話を聞きませんか」というお誘いがありました。聞きなれない「オモシロガラ」ということを質問してみると、着物の柄にも時代相を反映したものであるということがわかり、今までも教材開発をしてきた私にとって、興味深いことから二つ返事で引き受けることにしました。

コロナ禍でもあり、実際に生徒たちを美術館に引率しての美術鑑賞をすることはできませんでしたが、出前授業をしていただくことになりました。

M氏による「オモシロガラ」の出前授業

こちらの方も、指導計画を鑑み、美術科と社会科でコラボの授業をすることになりました。美術科は、作品の鑑賞、社会科は公民で最終単元に「国際平和」の学習があったので、教科書の指導計画に沿って授業を行うことになり、全職員に授業公開をしました。

１２月の半ばには、中学部３年生は受験のため大半の生徒たちが帰国することになります。本校の卒業生であるM氏のお話を通して、今後の生き方についてのヒントとなるキャリア教育を視野に入れたものです。写真にある浴衣は、「オモシロガラ」の意味を浴衣の柄から理解してもらうために、授業の導入で浴衣の実物から導入したものです。９月１４日にアーヘンで国際騎馬大会が開催され、「ＴＯＫＹＯオリンピック２０２０」に協賛したものでした。開会式のレセプションで、デュッセルドルフ日本人学校の有志で「東京音頭」を踊ったときにいただいた浴衣を活用しました。

「オモシロガラ」というものは、時代相を表したもので、戦争中は着物の柄までも戦争に関するものが扱われているものです。社会科の教材開発をしてきた私にとっては、ドイツでこのような教材に出合うことができ、感激しました。また、「キュレーター」という仕事は、どのように、美術作品を展示して鑑賞してもらうのかということを具体的に理解することができました。実際に、本校の卒業生であるM氏から、キャリア教育の視点で授業を進めることができ、ドイツの芸術のレベルの高さを実感しました。

４.「他国文化を理解することは、自国文化の理解に他ならない」

ドイツに来た当初、自宅にテレビがなかったので現地採用の音楽科のＨ先生が鑑賞ＣＤを貸してくださいました。聞き覚えのあるメロディーがあり、Ｈ先生に尋ねてみると、日本での「こぎつねこんこん」「夜汽車」でした。かなりのドイツの音楽が日本に入っていることがわかりました。お菓子や医療の言葉も多く、ドイツと日本との結びつきは強いものです。

派遣されて、もうすぐ１０ケ月が終わろうとしています。新型コロナ感染により、オンラインによる授業に始まり、感染防止をした上で分散登校となりました。様々な学校行事の制約はあるものの、対面授業を行うことができることはありがたいことです。

現地学校「オープンスクール」で折り紙での交流

私の授業、「身近なものに教材を求め、興味関心をもたせ、子どもに追究させていく授業」です。

そのためには、一人一人の生徒の興味関心をとらえることにアンテナを張り巡らせ、その変容を認め励ますことです。何よりも教師自身が学び続け、子どもの興味関心を引き出す課題を提示することを常に求めています。

休日には、自転車や鉄道で、ドイツの街を散策しています。ちなみに、ドイツの鉄道ではお金を少し支払うと自転車を積み込むことができます。頭の中は、「どうしたら、目の前の日本人学校の子どもたちに楽しく充実した授業ができるか」ということを常に考えています。私にできることは、今担当している授業を充実していくことであると自分自身に言い聞かせています。

さらに、言及したいのは小学部で２年、３年、５年生に書写を教えていることです。「今月の素読」として、郷土出身の「金子みすゞ」「まど・みちを」などの詩を学年の発達段階に合わせて、季節感のある詩を選び紹介しています。特に５年生の担任が賛同してくださり、英語やドイツ語でも読ませたいということで、担当の先生方に訳していただいて、子どもたちに紹介しています。

現地学校「オープンスクール」で習字を通した交流

デュッセルドルフ日本人学校の近くには、世界的に有名な詩人である「ハインリッヒ・ハイネ」の生誕の地でもあることから彼の詩を読んでみたくなりました。夏休みにライン川下りに行ったとき、船から「ローレライ」の曲が流れてきました。これの詩もハイネの作詞であることがわかり、関心をもつようになりました。

ドイツの生活や文化にふれればふれるほど、日本文化にも関心が向き、双方の学びが深まっています。今後も、身のまわりのものに目を向けて、それを切り口に授業を展開していこうと思っています。

５．現地での日本人にインタビュー

日本でも、米作りに携わっている私にとって「豪州（？）で、アルプスの新鮮な水を使って作っているお米」「ドイツの小麦を使って作っている日本そば」などと聞くと、実際に現地に行って、携わっている方にいろいろなことを聞いてみたくなります。

先日、ドイツ在住のある日本人の方から、「ドイツに来て、どんなことが変わりましたか」という質問に、「ドイツ文化へふれることによって、日本の伝統文化をさらに深く学ぶことができるようになりました」と答えました。

実際に、日独友好１６０周年を記念して、デュッセルドルフで上映された「滝廉太郎物語」「森鴎外の舞姫」などを視聴したことがきっかけで、ゆかりのある地を訪れたり、先人の曲や書籍を入手して読んだりするようになりました。

公園にある卓球台で現地の人たちとの交流

ここデュッセルドルフは、ヨーロッパ最大の日本人のコミュニティーがあると言われています。先人たちが、この地で脈々と、現地の文化の中に溶け込みながら生活している賜物に他なりません。とは言っても、周りはドイツ人を始め、多様な人々が暮らしていますので受け入れられるのは、相当な努力があったに違いありません。これに甘んじることなく、積極的にドイツ社会に飛び込んでいこうと思っています。

最後になりますが、帯同者の妻は「デュッセルドルフからこんにちは」という誰に出すあてもない通信が１００号を超えています。私はと言えば、ノートにメモ書きで、知り合いに写真を送る程度でした。駄文ですが、貴研究会からの原稿依頼で、ドイツでの生活を見直す機会を与えていただきましたことに感謝しています。

拙稿がシニア派遣教員として、今後の派遣を考えられている方への参考になれば幸せです。私の最大の関心事は、地域です。日本人コミュニティーとして、現地でどのように機能しているのか、知りたくてドイツの地に在住されている日本人を訪ねては、インタビューをしています。異国の地で、ドイツ文化を受け入れながらたくましく生きる日本人に出会えると、私自身も元気が出てきます。不思議なことに、国籍に関係なく人との出会いの輪が次々に広がっていき、有難く思っています。

派遣されてすぐに学校の近くの教会で、「日本語でミサが行われています。関心のある方は、どうぞ」というポスターを見つけました。そこで、日本で宣教師をされているＨ牧師に出会い、「ドイツ文化はキリスト教と関係があるので、よかったら参加してください」という言葉に甘え、参加させていただいています。そこに集っている方との人間関係が広がっています。この他、デュッセルドルフでは、「日本クラブ」があり、現地旅行、音楽鑑賞、サークル活動などが行われていることは、誠にありがたいことです。このように、それぞれの赴任された地では、多かれ少なかれ地域の核になる組織があると思います。これらを上手に活用して、現地の文化にふれあっていきたいものです。

Singapore

シンガポール日本人学校クレメンティ校　寺内　健　2021．6．5　No.1

日本を離れて２か月

先月からの新たな規制により続いていたオンライン学習も今週１８日金曜日で終わりそうです。

日本を離れ、２か月が経とうとしています。渡航の前日まで、引越しや住まいの片づけに追われてしまい、妻も私もヘトヘトになりながら、渡航の日を迎えました。現地に着いてからは、２週間のホテルステイがあり、学習の準備や先生方とのオンライン会議をして過ごしました。２週間の間は、食事は廊下に置かれ、廊下を歩くことすらできない状況でした。そして隔離期間が終わり、５月中旬に引越しの荷物が届き、先週、段ボールに入った箱をすべて片づけ終わりました。鍋などの調理器具が届いたので、少しずつ自宅で料理をしています。

シンガポールでは、政府が厳しい規制を行っております。在住している人は、スマートフォンにアプリをダウンロードし、そのアプリに、各店舗や場所の入り口にある QR コードを読み取らせます。読み取れたかどうか確認する監視の職員が必ずと言っていいほどいて、確認ができないと店舗や施設の中には入れません。このアプリによって、誰が、どこに、いついたかを把握し、感染者が出た場合、濃厚接触者に政府から、PCR 検査をするよう連絡が来ます。今は感染者が１日２０～３０人くらいですが、５月の中旬に感染者が増加したため、１か月、すべてのレストランが閉鎖、２人以上での外出禁止、各企業へのリモートワークの通達がありました。私も、基本的にはオンライン授業を子どもと行っています。出勤は、週に１回ほどで、あとは、自宅でオンライン授業や会議などをしております。４月２５日に始業式が行われてから５月中旬までは、日本の学校と同じように、教科書を使って授業を進めていました。授業については、教科は日本と同じですが、体育と音楽はシンガポール在住の先生が英語で教えてくれます。そして英会話は週３回ありますので、英語に触れる機会が多く、子どもたちにとっては英語に親しむ機会が増えるよい環境だなと思います。オンライン授業が６月１３日まで続きますが、「オンラインでも教室の授業の質を落とさないように」「オンラインでしかできないことをやろう」と６年生の同学年の先生４人で日々打ち合わせをしながら授業を行っております。今後もこの場を借りて、情報を配信していきたいと思っています。

校舎と周辺の様子（都市ですが緑がたくさんあります）

Singapore

シンガポール日本人学校クレメンティ校　寺内　健　2021．6．18　No.2

シンガポールの衣食住

先月からの新たな規制により続いていたオンライン学習も今週１８日金曜日で終わり、来週から学校が再開します。新規感染者は一桁ほどです。強い規制がまだまだあります。レストランもまだ開店していません。しかし、できることの中で楽しめることを見つけていきたいなと思っています。今日から、「衣食住」について紹介します。

どんな服を着ているの？

シンガポールの気候は、年中暑いそうで。湿気もけっこうあります。私はこちらに来て、まだ一度も長ズボンを履いていません。現地に住んでいる方々も、学校の先生方も涼しい格好をされています。肌寒いときもあるかもしれないと思い、長袖、長ズボンやジャケットなど持ってきているのですが、まだ出番はありません。

しかし、日本の梅雨時期や真夏に比べると過ごしやすい気がします。６月は一番暑いときで、日中は３２、３度くらい。木陰にいるときにかぜが吹くととても気持ちがいいですが、日差しは強めです。そして、シンガポールには、いろいろな人種の方がいらっしゃいます。通勤で使うバスの中にも様々な人種の方がいらっしゃいました。そんな多民族国家だからこそ、服装も宗教によっても違いますし、出身の国の雰囲気が感じられる気がします。

国旗の意味

上部に白い三日月と五つの白い星が配置されています。赤は普遍的親愛と国民の平等、白は満ちと永遠な清澄と高潔を意味し、三日月は隆盛する若い国家、五つの星は、民主、平和、進歩、正義、平等の理念を表すそうです。

Singapore

シンガポール日本人学校クレメンティ校　寺内　健　2021．7．20　No.3

規制と学校の様子

７月は学校での授業を行うことができました。シンガポールの新規感染者は増えたり減ったりで、街の中での規制は続いています。レストランは６月中旬に開きましたが、二人までしか入れないため、家族連れは基本的に自宅での食事か、レストランの場合は席を離れて座ります。私は娘がいるので、２人と１人に分かれています。規制はまだまだ続きそうですが、できることの中で充実した日々を過ごしたいと思います。

通常の時程

８：００	朝の会　健康観察　朝学
８：３０～　９：１５	１時間目
９：２５～１０：１０	２時間目
１０：３０～１１：１５	３時間目
１１：２５～１２：１０	４時間目
１２：１５～１２：３５	お弁当
１２：３５～１３：０５	昼休み
１３：１０～１３：５５	５時間目
１４：０５～１４：５５	６時間目
１５：０５	バス下校

さて、今回は学校の様子について紹介したいと思います。クレメンティ校は大きな学校です。教員も６０人ほどおり、クリーナーさんや警備員さんを含めると、かなりの人数になろうかと思います。通常の時程は、左のようになります。給食とそうじはありません。下校の時刻が３０～４０分日本の学校よりも早いので、この差は本当に大きい気がします。私が担当する６年生では、国語と算数を教科担任制にしており、他の教科も教材研究を分担して行うので、授業に関する打ち合わせする必要があり、毎日の３０分ほどの時間は大変貴重な時間だと感じます。しかし、コロナにおける規制により、授業中に２人以上でのグループ活動や体育での活動はできません。２週間前までは、３０人以上の音楽の学習ができずに、教室と音楽室とをオンラインでつなぎ、授業をしていたほどです。時間的には少し余裕はありますが、その分、規制のために対応しないといけないことは増えているように感じます。しかし、私にできることは、６年生の子どもたちが笑顔で最後の年を無事に終えられること。そして、保護者も含めて、安心して学校に日々通えるようにすることです。そのために、自分にできることを一生懸命やるしかないなと思っています。

※夏休みは８月１日からで、２学期の始業式は８月３０日です。

職員室の様子

Singapore

シンガポール日本人学校クレメンティ校　寺内　健　2021．8．20　No.4

シンガポールの夏休み

シンガポール日本人学校クレメンティ校では、３０日から２学期が始まります。夏休みが終わりに近づくと、なんだかもやもやしてきますね。（笑）校内の研修や校外の研修も設定されておらず、各自が見つけたオンラインで研修に参加しています。先生方それぞれ、日頃もちにくい家族との時間や海外ならでは楽しみを見つけて充実した日々を送っていらっしゃるようです。私も、海外ならではの楽しみを見つけようと、いくつか観光地に行きました。今回は、仕事を離れて、紹介したいと思います。

左上：マーライオン公園です。金融系の企業や高級ホテルが並ぶ大都市でした！

左下：チャンギ国際空港内のジュエルという施設です。たくさんのお店や人工の巨大な滝があったり滝の横を電車が走ったりと、未来ではないのですが未来に来た感じです。

右　：アラブストリートの壁画です。シンガポールは多くの文化が混在しています。「どの文化も互いの文化を邪魔していない、静かに尊重し合う」雰囲気を感じます。

Singapore

シンガポール日本人学校クレメンティ校　寺内　健　2021．10．23　No.5

閉塞感からの脱出

シンガポールの新規感染者は、２週間前から３０００人を超え、ここ2～3日は４０００人を超えています。本校では、教員には出ておりませんが、子どもや家庭、警備員さんにと、感染者が出ております。日本は落ち着いてきたと聞いていますが、おそらく感染対策は引き続き行われていると思います。シンガポールでは過去最高の感染者数ですが「With コロナ」ということで、ロックダウンをせずに、「レストランは２人組まで」などの規制はありますが、ほぼ通常通りに生活を続けております。しかし、辛いのは子どもたちです。私は６年生の担任をしておりますが、２回のオンライン学習期間があり、４月から合計すると２か月ほど自宅での学習をしました。そして、修学旅行、運動会も中止。教室内では、席に座って隣の人とだけ話をし、立ち歩いて話すことは禁止です。外で子どもたちが入り乱れて遊ぶこともできません。他にもいくつか規制があります。小学校生活最後の年に、苦しい思いをさせているし、担任として、「離れなさい」「ディスタンスを取ろう」「話すのは自分の席だよ」「３人組になってるよ」など言いますが、子どもたちの気持ちが分かるからこそ、子どもたちに「こんなこと言うの、やだなぁ」と思いながらも、規制を守らせています。修学旅行が中止になった日、学年主任が、何か学年でイベントをやろうと提案してくれました。子どもに提案すると、もちろん賛成で、さっそく実行委員を立てて、イベントの企画がスタートしました。実行委員の子に、どんな気持ちで企画しているかと尋ねると「小学校生活最後の年は戻ってこない。だから楽しめるかどうかは自分たち次第なんだ」と言葉が返ってきました。閉塞感はあるけれど、あきらめるのではなく、規制がある中で別の方法で楽しもうとしている子どもの熱意が素敵でした。１０月２２日（金）に、４学級をオンラインでつないで第１回のイベントをスタートさせました。「学級対抗、竹の子ニョッキ」です（笑）子どもたちは、席を移動せずにみんなで楽しめます。残念ながら私たちの学級は最下位でしたが、次は勝ちたい、とか次は何をやろうかと、前向きに話をしていました。「閉塞感からの脱出」は、子どもたちと共に創る行事や授業をきっかけになるのではないかと考えて、過ごしております。長い文章にお付き合いいただきありがとうございました。

East coast park

海辺でとても気持ちがいいです

Singapore

シンガポール日本人学校クレメンティ校　寺内　健　2021．12．6　No.6

「楽しい」は自分たちで創る！

私は、現在６年生を担任しておりますが、どこの学校の６年生も、卒業がいよいよ近づいてきたことを感じているのではないでしょうか。シンガポール日本人学校クレメンティ校の６年生も同じです。日本と遠く離れていますが、１年間の流れや学習内容に大きな差はなく、日本の学校の行事を行います。しかし、現在、コロナ感染対策により、６年生としての働き、例えば、委員会、クラブ活動は年度初めから休止状態。他学年との交流もなし。ひたすら、自分の学年の授業を進めています。修学旅行も今のところ中止です。そんな６年生と、「何か行事をやろう！」ということで、「ミニ運動会」を計画することになりました。各学級から実行委員を立て、昼休みに話し合います。まずは、「赤白の対抗にするか」「種目は何にするか」「５人以上のグループは作ってはいけない、マスクオフの場合は３m以上の間を取るなどの国の規制は守れるか」子どもたちは、「１」からというより規制を考えつつも「０」から創り出そうとしています。これまで私が経験してきた運動会は、プログラムが決められており、教師主導で、子どもが発想するという行事ではなかなかありません。子どもたちの中には、教師に叱られる時間だと感じている子どもも少なくないのではないかと思います。「楽しい」は自分たちで創る！これがこれからの教育が目指す形なのではないかと、大げさかもしれませんが、そう感じました。教師の言うことを聞いて一生懸命がんばることも大切です。一方で、教師の言うことを聞いた子どもたちに「よくがんばったね！」と伝え続けると、大人の言うことを聞くことがよしという教育になってしまうのではないか。教師が思い切り褒めるのは、自分の理想の実現に向けてトライした姿なのではないか。子どもが何をしたいのか、どうなりたいのかを問い続けて、その過程を子どもと一緒に歩める教師でいたいと思います。「０」から創るのは、大変な部分もありますが、６年部の教師みんなで力を合わせて乗り越えていこうとしております！

Singapore

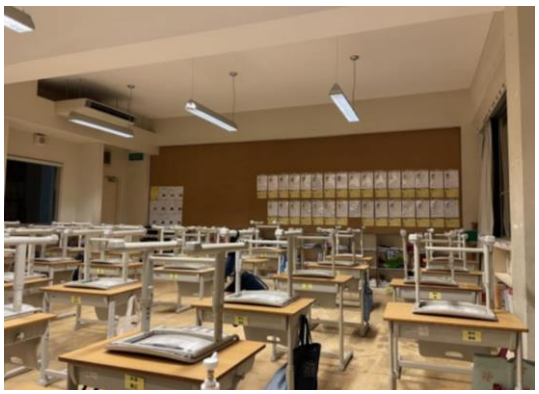
シンガポール日本人学校クレメンティ校　寺内　健　2022．1．24　No.7

シンガポール日本人学校、学校紹介

早いもので、３学期に入りました。２学期に行った６年生みんなで作ったミニ運動会は大成功でした。体育で撮った綱引き、徒競走、ボーリングの動画を編集し、オンラインで６年生全教室をつなぎ、動画を流しながら子どもが実況中継をするという斬新な運動会でした。シンガポールの気候は、年間通して３０度を超え暑いですが、最近はとても涼しいです。さて、今回は、学校紹介をしていこうと思います。

職員室は５０人以上の先生方が働いています。職員会議はマイクを使うくらい大きな職員室です。

会議や打ち合わせをする場所です。ちょっとした打ち合わせを各分掌で行います。



教室は日本とほぼ変わりません。クリーナーさんがいるので児童の掃除時間はありません。

体育館はとても広いです。体育の授業も日本の学校と同じように行われます。設備は整っています。

II　外国語教育・国際教育の実践

外国語科における指導と評価の一体化について

山口市立二島小学校　教諭　藤元　涼太

1.　はじめに

外国語科では、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することを目標としている。

そこで、本校では、相手に自分の思いを伝えるためのコミュニケーションを大切にして取り組んできた。

２．実践事例

（１）単元名　５年　Unit6「What would you like?」

ていねいに注文したり、値段をたずねたりしよう。

（２）単元目標

自分のことを伝えたり、相手のことをよく知るために、ていねいな表現を使って、注文したり会計したりすることなどについて、短い話を聞いてその概要が分かったり、伝え合ったりすることができる。

（３）教材について

本単元は、Unit３で学習した、「What do you want?」のていねいな表現の仕方を中心に学習し、ていねいに注文したり、値段を尋ねたり答えたりできるようにすることを目標としている。ここでは、主にお店での注文の場面を想定し、店員役は、ていねいに注文を尋ねる表現や値段を答える表現、お客さん役は、ていねいに自分が頼みたい物を注文したり、値段を聞いたりする表現を身につけることがねらいとされている。

（４）児童の実態

外国語活動を通して英語の基本的な表現には触れてきており、外国語を学ぶことへの抵抗感はないが、英語の音への慣れ親しみが少なく、アルファベットの音の聞き取りや発音に苦手意識があるとともに、コミュニケーション活動などでは、意識しきれずカタカナ英語になることが多かった。

そこで、５年生での外国語の授業では、Sounds and Letters の活動やＡＬＴによる英語の発音を聞く活動を通して、英語の音への慣れ親しみを充実させるような指導を続けた。例えば、ｒとｌの発音の違いやｄ、ｔなどの音に親しませた。

コミュニケーション活動には、多くの児童が積極的に取り組む姿勢が見られた。初めて学習した表現を自分で判断して使えるようになるまでには時間がかかるが、何度も練習したことのある表現は積極的に使うことができていた。コミュニケーション活動に入るまでの慣れ親しみの学習の重要性が感じられる一場面だった。

（５）単元指導計画及び評価項目

	めあて	評価		
		知	思	主
1	ていねいな注文や、値段のたずね方を知ろう。	○		○
2	自分が食べたいものをていねいに注文しよう。	○		○
3	ていねいな英語で食べたいものをたずねたり、注文したりしよう。	◎	○	
4	値段をたずねたり、答えたりしよう。	◎	○	
5	ふるさとの料理でメニューを作ろう！		◎	
6	ふるさとメニューを注文しよう！		◎	○
7	Unit6 で学習したキーセンテンスの語順を考えよう。	◎		

○記録を残さない評価（形成的評価）　◎記録を評価

※毎授業終わりに振り返りを行った

（６）授業の実際

①主眼　ていねいな表現を使って注文したり、会計したりすることができる。

②流れ

１時間目にキーセンテンスへの出会いとして、ALT と T1 の Small Talk を行った。初めて触れるキーセンテンス「What would you like?」がわからなくても既習事項や生活の中で使っている英語から想像し聞く力を養う。また、場面設定を明確にし、より想像しやすいようにした。「What would you like?」が「What do you want?」の丁寧な表現であることに気付かせることでもより身近に感じさせた。

カタカナ英語からの脱却としては、前述したように、Sounds and Letters の活動を毎授業の最初に帯活動として取り入れた。また、同時にアルファベットの名前だけでなく「音」を中心に学習させた。

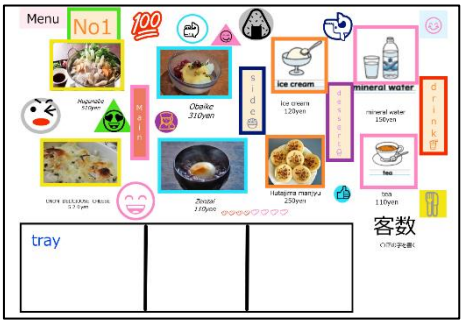
２時間目は「I'd like～.」の表現を学習した。自分が注文したい食べ物を丁寧な英語で答える表現に慣れ親しむために、WordLink の単語とつなげて楽しく覚えるゲームを行った。単語を覚える際には、キーワードゲームを行うことでも楽しくいつの間にか英語を覚えている活動を目指した。この活動は単元を通して行った。

３時間目は「What would you like?」の表現を学習した。前時に学習した「I'd like～.」とあわせて、「丁寧な表現でたずねたり、注文したりしよう」というめあてを設定し、Picture Dictionary の p８・９を利用して店員役とお客さん役に

分かれてやり取りの練習を行った。その際 SKYMENU の発表ノートを利用して作成したメニュー表を使ってタブレット上でメニューを動かしながら注文する、実際のお店のような場面設定をつくった。

単元の６時間目で行う、話す（やりとり）の授業に向けて、【思・判・表】の A 評価として「相手の質問や答えに即興で反応できる」ことを基準としているため、相手の答えに対して反応するときの相槌も同時に学習した。例）I'd like a salad. という答えに対して、That's nice!や It's healthy. など。日常生活で会話をするときに相手の答えに対して、無反応な場面は考えられないことからもこの評価基準は重要であると考えた。

４時間目は「How much is it?」の学習をした。ここでは、質問よりも値段を英語で答えることを重視して練習を行った。２時間目から「食べ物」の単語と並行して数字の学習も行っていた。ただ、店員役になって代金の計算をして出した答えを英語で答えるプロセスはここで初めて行うため児童は少し混乱しているようにも見えたが、練習を重ねるうちにスムーズに答えられるようになっていた。



５時間目は「ふるさとの料理でメニューを作ろう」というめあてで、６時間目に行う活動の準備を行った。SKYMENU の発表ノートを使ってメニュー表を作成した。

６時間目の活動がより身近に感じるような場面設定にするためにふるさとの食材を使った料理をふくめて、メイン・サイド・ドリンク・デザートをそれぞれ２つずつ考えた。

タブレットを使って作成したことのメリットとして、子どもの意欲が向上したこと、何度でもやり直しがきくこと、画像や絵の印刷の必要がなく教師が準備をする手間が省けるということがあげられる。デメリットとしては、タブレットの操作スキルをあらかじめ身につけさせておく必要があること、また、機械トラブルが起こることがあることがあげられる。

６時間目はこれまで学習してきたことを披露する場として、それぞれが店員役、お客さん役になりお買い物の活動を行った。

１０００円以内でメイン･サイドをそれぞれ１つずつ､デザート・ドリンクから１つ、合計３つを注文するという設定にした｡まずは教師がロールプレイングを行って活動の確認を行った｡ここでも電子黒板でメニュー表を開き操作しながら注文を聞いた。評価基準となる相手の答えに即興で反応する表現もここで確認した。

その後児童同士の活動に移った。最初は、児童が店員役とお客さん役に分かれて実際のお店での場面を想定して活動を行った。場面設定として、児童はエプロンと

帽子を身に着けるようにした。また、カウンター（机）には、そのお店のおすすめメニューが書かれた看板を貼った。店員役の児童はタブレットをもって接客を行い、お客さんもしくは店員さんがタブレットを操作しながら会話を行った。

メニュー表をタブレットにしたことで自然と目線が上に行きアイコンタクトをしながら会話をすることができたため、より自然なコミュニケーションにつながった。

おすすめメニューをかいた看板

本学級は１１人と人数が少ないため、普段かかわっていない人とのコミュニケーション能力も評価の一つとして大切だと考えたため、参観者にも参加してもらった。児童が店員役、参観者がお客さん役として活動を行った。参観者の「What's this?」や「What's taste?」などの想定外の質問にも動じることなく既習事項を活用して即興的に答えていた。（参観者には、あらかじめ質問をしてもらうように頼んでいた。）

この授業では、評価基準を提案事項として参観者にも児童の評価をしてもらい評価基準が適当かどうか判断してもらった。以下がその内容

A・・・ていねいな表現を使って注文したり、会計したりすることができ、簡単な語句や基本的な表現を用いて、お互いの考えや気持ちなどを伝え合っている。（ジェスチャーや表情も含む）

B・・・ていねいな表現を使って注文したり、会計したりすることができる。（What would you like?/I' d like~./ How much is it?/ ~is ○○ yen.を言うことはできるが、それ以外の即興的な反応があまり見られない。）

C・・・ていねいな表現を使って注文したり、会計したりすることができない。（キーセンテンスを言うことができない。）

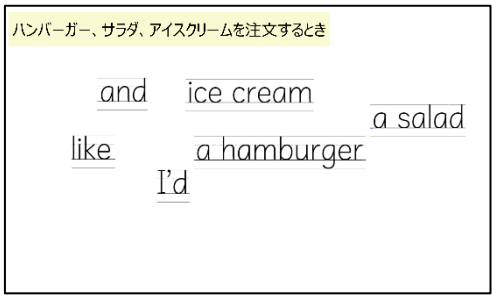
※ 即興的な反応

これまで学習した表現や単語、知っている表現を使って質問に答えたり、反応したりすること。

反省会では、本時での評価としては大方適当だろうという反応が多かった。ただ、学習指導要領と照らし合わせて、児童の英語の能力をどこまで求めるかによって、「即興的な反応」をA評価に入れるのは児童の実態によっては難しいのでは、とい

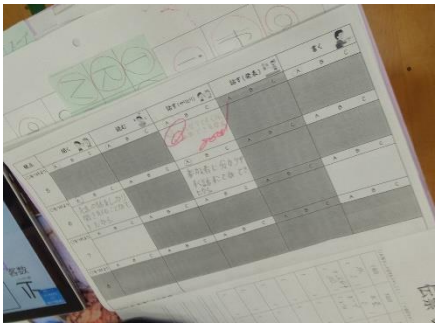
う意見もあった。

７時間目は単元の総復習として、キーセンテンスの語順の並べ替えを行った。キーセンテンスを単語に分けたカードを発表ノート上に準備しておき、日本語の質問を参考に単語を並び替え正しい語順にする。その際、英単語にあった日本語を英単語の下に配置させることで、日本語と英語の語順の違いに気づかせた。この内容は６年生の文構造にあたり、５年生の内容ではないが、６年での学習をスムーズに行えるように５年生でも行った。



（７）指導と評価の一体化

振り返りカードには、その単元でねらう５領域それぞれのめあてを記しており、それに沿って児童は振り返りをした。ここでは、教師が意図的に「記録に残す評価」「指導はするが記録に残さない評価」を振り分けた。



また、パフォーマンス評価については、これまでの児童の実態を踏まえながら、その時間において期待する言語表現を評価規準ごとの具体例として挙げ、授業中にそれに沿った見取りができるように工夫した。その授業における評価規準は、これまでの学びを次の学びにつなげるための「期待する学び」である。

例えば、本授業では、店員役の児童から「What would you like?」と尋ねられた際に、お客さん役の児童が「I'd like A,B and C」と答えるのがＢ評価とすると、その児童が「What's this?」と付け加えている姿をＡ評価とする、など、「児童がこれまでに学習した単語や表現を使って即興的に会話を広げている姿」を評価することである。この際に指導者が注意すべきことは、児童の言語表現について評価するのか、ジェスチャーや表情などの身体表現を＋αとして評価するのを単元の狙いに即して見極めることだと考える。

（８）実践を終えて

まず、この授業をするにあたり私自身の挑戦として掲げていたのは、英語が苦手な教員がどのようにして外国語の授業と評価をするかである。その手立てとして、今回は電子黒板やタブレットを使用した。また、児童は、外国語に対して苦手意識を持っているわけではなく、むしろ ALT と積極的に関わろうとする意欲が多くみられていた。その意欲をより向上させるためには、教師が ALT と多くかかわっている姿を子どもに見せることだと考え、私自身が学年当初から ALT と積極的に関わった。その結果、授業では、他校の ALT とも積極的に英語で関わったり、参観者にも英語で話したりする姿が多く見られた。児童の振り返りの中にも「たくさんの先生と英語で話すことができた」と書かれていた。

ICT を活用した外国語の授業として、ICT の利点「共有・保存」をいかし、場面設

定に多く活用した。児童は、タブレットを操作することに対してとても意欲的で、メニュー表を作るときには時間も忘れて夢中になっていた。教師側の準備としても、用紙や写真の印刷をする必要がないため業務改善につながった。特に、メニュー表に必要な料理の参考資料や写真、絵などは、その都度タブレットで調べながらメニュー表に貼り付けることができるため時間の短縮につながった。ただし、発表ノートの操作方法や写真の保存の仕方などのスキルをあらかじめ身に付けておく必要がある。

６時間目の研究授業では、評価規準を明確にして行ったが、単元のねらいに即した評価規準をあらかじめ設定し、それに向けた指導を単元を通して行うことが指導と評価の一体化においてとても重要だと感じた。具体的には、A 評価の規準としていた「即興的な反応」を単元を通して学習したことで参観者からの予期せぬ質問にも何とか英語で答えようとする姿が多くみられた。

今後の課題として、今回 A 評価規準として挙げた「即興的な反応」を今後の授業の中で自然と使えるようにする活動を取り入れていくことが大切だと考える。なぜなら、Unit のキーセンテンスを覚え言えるようになることは知識・技能の段階であり、それらを使いながら＋α「即興的な反応」をすることが思・判・表の評価になると考えるからだ。

楽しく積極的に英語でコミュニケーションできる児童の姿を目指して授業づくりを行っていきたい。

３．参考資料（本時案）

本時案　　１１月１３日（金曜日）　５校時　　於：体育館

①主眼：ていねいな表現を使って注文したり、会計したりすることができる

②学習の流れ

学習内容	主な言語活動・児童の反応	○教師の支援　　◆評価
1．Greeting ・ALT とのあいさつ	A:How are you? B:I’m~.　A:Why? B:Because …	○CRT と ALT とのやりとりを通して活動の見通しをもたせる。
・参観者とのあいさつ（1対1）	I’m~. Nice to meet you. 歌いながら、学習した表現を想起する。	○英語を使う環境づくりのため、児童と参観者とのコミュニケーションの場を設定する。 ○ていねいな表現を想起させる。
2．Sing ・”What would you like?”	特に終わりのｋやｔの音の特徴に気を付けて発音する。	○数を復唱しながら１００までの数の言い方を確認する。 ○ALT の発音を聞かせ、子音で終わる音に気を付けて発音するよう促す。
3　Sounds and Letters ・Alphabet の音	既習の単語を想起する。	○これまでに慣れ親しんだ単語の発音に注意しながら正しい音で発音するよう促す。
4．Word Link ・単語（食べ物・数字）	ていねいな表現で注文や受け答えをする活動のイメージを深める。	○CRT と ALT が、児童の活動のモデルとしての会話をする。ここでは注文と会計場面のやりとりをし、既習事項を想起させる。
5．Small Talk ・お店屋さんでの会話	A: Hello. B: Hello and welcome. What would you like? A: I’d like A, B and C.	○所持金を１０００円とし、その中で食事を注文できるようにする。ゲーム的要素を取り入れることで児童が意欲的に取り組めるようにする。
6．Let’s Try ・ふるさとメニューを注文し合う。 ・タブレットで作成したメニュー表を活用した注文 ・お店役とお客役に分かれての注文・支払いと会計 ・参観者への関わり ※お店役として何人に販売したかを競う。	B: OK. A, B and C. Anything else? A: No. thank you. How much is it? B: A is 300 yen.B is 450yen.C is 240yen. 990yen,please. A: OK. Here you are. B: Thank you. Here you are. A: Thank you. B: Have a nice day. A: You too.	○相手の言葉に反応できるよう促す。 ◆ていねいな表現を使って注文したり、会計したりすることなどについて、簡単な語句や基本的な表現を用いて、お互いの考えや気持ちなどを伝え合っている。 （思：机間指導、ふり返り）
7．ふり返り 本時の活動をふり返りシートに記入する。		

ふるさとメニューを注文したり、会計したりしよう。

外国人児童教育の実践と課題

山口市立平川小学校　教諭　辻本　紳一朗
（平成６年度派遣　オーストラリア　パース日本人学校）

１．　本校の日本語教室

日本語教室は、日本語指導が必要な外国人児童生徒が一定期間在籍する教室であり、日本語能力の育成を主なねらいとし、個々の能力に応じた教材を使い、生活言語や教室での学習に必要な日本語を指導する場である。本校には現在５カ国（インドネシア、バングラデシュ、ナイジェリア、ベトナム、モンゴル）の外国人児童が在籍し、そのほとんどは校区内にある大学に通う留学生の子どもたちである。コロナ禍により、転入予定の外国人児童も数名待機中である。

２．外国人児童の実情

本校の外国人児童は、日本語が分からない状態で来日した子どもばかりである。ほぼ全員が親の留学に伴って来日しており、言葉が通じず、文化の異なるこの地で学び、生活することを余儀なくされている。そして、彼らのほとんどは２～３年のうちに帰国し、そこでの学習や生活がそう遠くない未来に待っているのが現状である。

本校に在籍する外国人児童のうち、幼少期に来日し、日本の幼稚園や保育園に通った経験のある子は、ある程度「生活に必要な日本語」を身に付けている。逆に、来日してすぐに小学校に入学した児童や、他国の小学校から転入した児童は、日本語能力をほぼ有しないままに日本の授業を受けることになる。

また、ある程度「生活に必要な日本語」を有する児童についても、「学習に必要な日本語」を身に付けているわけではなく、「話す」「聞く」力はあっても、「読む」「書く」力を有しているわけではない。特に幼児期に来日し、ある程度の日本語能力を有する児童に対して配慮すべきことは、「友達とおしゃべりができる」ことと学習言語能力を習得していることは異なるということである。

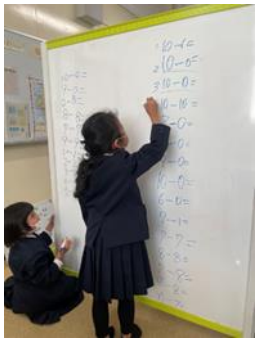
こうした児童の多くは「わかっている」つもりの日本語が教科等の学習場面で使えない（学習場面で求められる情報を頭にインプットし、それを分析したり考察したりすることができない）ことにぶつかる可能性がある。

さらに、保護者に経験がないため、日本の学校教育についての理解が難しく、こちらの「当たり前」がなかなか伝わらないことが多い。提出物が滞ったり、持参物が揃わなかったり、児童の遅刻や天候を理由にした欠席があったりすることも多い。保護者と日本語で意思疎通をすることも難しい。

外国人児童を有する学校で起こりがちな問題としては、日本語ができないことで、外国人児童を「自分たちよりも劣った子」と周りが見ることや、文化や国籍による偏見などが考えられる。こうした否定的な見方が伝わると、外国人児童の学習意欲の低下につながる

可能性がある。幸い本校ではこうした状況は見られないが、指導者としては、外国人児童自身が自分のアイデンティティを肯定的に捉える環境作りを常に意識すべきであろう。

３．外国人児童を育てる視点



外国人児童の学習支援にあたっては、児童の母語が日本語と類似した文法構造であるか、漢字を使用する国か、母国での学習経験を日本の学習に転移させることや学習における思考・学習態度に関わる力を有しているか、ということも関わるため、日本語教室は、スタンダードなカリキュラムに沿って指導することが難しく、個々の実態に応じ、何が必要で何が可能かを考慮した対応が必要となっている。

例えば、母語で学習済みの内容については、既習の母語を日本語に置き換えることで児童は理解できる。つまり、母語での学習経験を日本の学習への転移することが可能である。

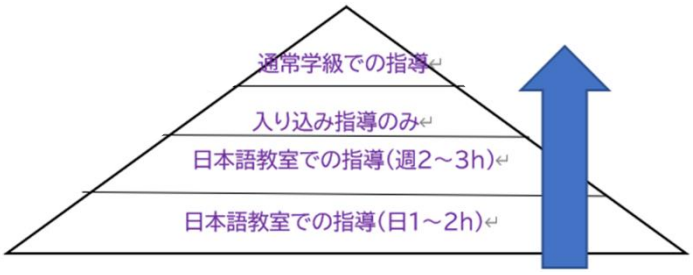
しかし、母語で未習の学習内容については、日本での学習活動を通して学び、考え、表現することを通して言葉の意味や概念を形成していく必要がある。

併せて、学習内容そのものだけではなく、学習における思考や学習態度に関わる力の育成も必要となる。

児童のこうした実態把握については、保護者へのアンケートも活用しながら、個々の実態に応じたカルテを作成し、担任との情報共有や次学年への情報伝達に努めている。保護者との連携により、多面的に児童を育てるのみならず、保護者の不安を解消し、保護者を支えることが外国人児童のよりよい育ちにつながると考えている。

４．個々のゴールを見据えた日本語指導の必要性

本校に転入学した外国人児童には、まずカードを使った簡単な日本語能力や計算能力の確認後、ＤＬＡ（対話型アセスメント）と呼ばれる測定ツールにより、それぞれの語彙力チェックを行う。基本的には、その結果をもとにしたＪＳＬ評価のステージに応じた支援を行うことになる。本校では、それを参考にしながら、大まかに右図のようなステージでの支援を実施している。



外国人児童が自力で通常の授業を受けることが最終ゴールとなるわけであるが、日本語指導の内容に大きく関わるのは、外国人児童やその保護者それぞれの意向を尊重した対応である。特に低学年児童では、保護者の意向が大きくウエイトを占める。

⑴ 生活言語としての基礎的な日本語能力の習得

来日して間もない児童や１年生児童には、教師の言葉や周りの友達と関わるための「サバイバル日本語」と言われる生活上必要となる健康や安全に関する日本語が必要と

なるため、主に日本語教室での「取り出し指導」を行っている。

初期のひらがな指導としては、パズルやカード、ローマ字を併記したひらがな表を使った「読み」とワークシートを用いた「書く」指導を連携させている。その学びを生かしたパズルを用いた活動では、個々の児童の理解度を見取ることもできる。

実態に応じ、上学年の児童であっても「読む」活動には１年生の国語教材を用いるようにしている。大切なのは、「できないこと」ではなく「できること」を少しずつ増やすことである。特に母国での学習をある程度身に付けている児童には、多くの日本語を用いずに問題解決ができる算数や理科、また外国語や造形活動、器楽演奏などの学習において自己肯定感をしっかりと維持するなど、児童の心理的ストレスを考慮しながら日本語指導のステージを進めることが重要である。

(2) 日本での学力を保障

通常授業での理解を深めるために、通常授業への「入り込み指導」を行っている。ここでは外国籍児童に寄り添いながら、教師の発問を平易な日本語に言い換えることや、英語や翻訳機を用いた母国語での通訳を行うことで、日本語そのものを習得することではなく、学習内容を理解し、児童の思考・判断を支援することに努めている。

また、日本語教室での「取り出し指導」を行い、教室における日本語授業の理解が追いつかない場合や、来日までに母国で学んだ学習内容とのギャップを埋める場合に、児童の理解を個々の実態に応じて個別の支援をしている。

ここでは特に、授業において必要な「学習ことば」を理解できるようにすることが必要である。それは、学習内容を理解し、児童の思考・判断を支える言葉であり、教科書が読める力であり、授業中に飛び交う言葉が分かる力である。

併せて、比較的長期間にわたり日本に滞在する児童、とりわけ中学校への進学を予定する児童には、特に日本での学力保障が要求される。日本語指導と並行し、通常の授業での支援や補習に重点を置く必要がある。

(3) 帰国後に使える学力の保障

短期滞在をする児童には、通常授業の理解に加え、帰国後の学習を支える学力の保障が必要となる。特に算数や理科における知識・技能や、全教科・領域における論理的思考力の向上などである。帰国を控える本校児童が求められているのは、母国語の再習得である。日本語での生活時間が長くなったため、両親による支援やインターネットでの学習を学校での学習に加えて実施している児童も少なくない。このことについての本校での対応は不十分であり、今後の課題となっている。

(4) 日本語教室の役割

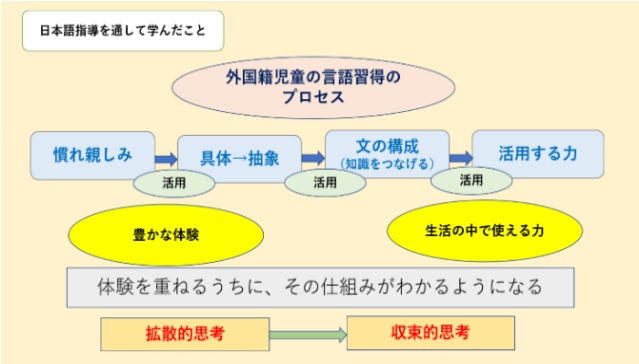
日本語教室は、児童の自己表現の場づくりも担っている。通常の教室の中ではなかなか自己表現ができなかったり、思いを伝えることができなかったりする児童の思いや考えをしっかり聞くことや、母語での自己表現をする環境をつくることにも努めている。

また、児童の生活状況や家庭環境、文化・宗教に関わる情報などを収集し、担任と連携しながらよりよい支援へとつなげるようにしている。

児童が学校内だけでなく、社会とつながることができるよう、サバイバル日本語に加え、社会とつながるための言語能力を育成する必要もある。一人一人の児童が、日本での生活経験を基盤に、いずれはグローバル人材として、それぞれの母国と日本をつなぐための人格形成を見据えた支援である。全教職員に向けた通信「グローカルだより」による情報発信も継続している。

5．外国人児童の理解を促す工夫

(1) 外国人児童の言語習得のプロセス



これは本校児童の日本語習得の状況についてまとめたものである。

外国語教育における言語習得のプロセスに重なるものであり、豊かな言語体験が大切であることを改めて認識するものである。とりわけ来日してから間もない児童や、低学年児童には、「しっかり聞きしっかり話す」場づくりが有効であり、「使いながら慣れ親しむ」中で、母語とのつながりをもとに日本語の仕組みを理解していくと考える。

生活言語である母国語形成ができている児童は様々なものの名称や表現、また言語形成のための知識や技能をインプットしているため、言語習得のハードルが低くなっている。

(2) 学習支援のための環境づくり

日本語能力が高くない児童は、主に視覚から情報を収集している。教師がモデルとなって提示する教材や板書、周りの友達の動きなどである。こうした児童には。視覚を通した理解を促す支援が有効である。例えば日本語で表記されている内容や問題場面を図や絵で表したり、iPad を用いて画像を見せたりすることで、児童はその内容をより正確に理解することができる。日本語習得には、外国語活動で用いる絵カードの活用も有効である。

児童が自主的に読んだり書いたりする活動を支援するために、ローマ字が併記された

ひらがな表をラミネートし、下敷き代わりに使えるようにした。さらに、日本語教室内には、いつも目に触れることができるような大判のひらがな表とカタカナ表、簡単なあいさつや生活言語表現などを新たに掲示したり、教室内にある備品等の名前をひらがな表記したり、児童の日本語能力に応じて選択できるような読み物教材、ゲーム感覚で学べる音声付きの視聴覚機器などを常備したりしている。また、個々の児童の学習成果や使用している学習材などをそれぞれの名前が書かれたボックスに入れ、児童が自分で取り出したり、収納したりできるようにした。このことにより、日本語教員間での個々の児童の学習状況の共有が容易になった。

(3) 外部人材による支援

本校には、年度途中に突然編入学をしてくる児童も多くおり、そうした児童のために、現在３名の外部の方（外国人２名、日本人１名）が通訳支援に来てくださっている。

翻訳機器や翻訳ソフトには限界があり、児童の母語をうまく訳せないことから生じる問題もあるため、保護者連絡にもこうした通訳者の支援が大きな助けとなっている。

６．様々な配慮への対応

(1) 宗教上の配慮

本校に在籍する外国籍児童の多くはムスリムであり、ラマダン期間には断食やお祈りをする児童が多く、日本語教員がその対応をすることが必要になる。

また、年間を通して食事や服装、着替えなどに配慮する必要があるため、個々の児童の実態を把握すると共に、保護者や担任との情報共有に努め、給食の献立や着替え場所の確保を含めた適切な支援をすることが重要となる。併せて発達段階に応じた他の児童の理解のための説明も必要となっている。

(2) 考え方の違い

国によって、学校教育に対する姿勢も異なる。毎日学校に通うことが常識でない場合が多く、前述のように連絡がないまま学校を休んだり、雨が降ると当たり前のように登校しなかったりする児童もいる。こうしたことへの対応のため、日本語教室では外国人児童の保護者への Google フォームを使ったオンラインでの連絡方法を開始することにした。

(3) アイデンティティの揺らぎ

外国籍児童のほとんどは、成長・発達の途上で、自分の意思ではなく、文化間移動を課せられた子どもたちであり、母語で多くの友達と接していた日常から、突然異なる言語や文化の環境下に身を置かれている。文化間移動をする年齢にもよるが、周りが発する言語が理解できない、伝えたいことが伝えられない、学習では母語で身に付けた学力

を十分に発揮できないといったジレンマに陥ることが多く、不適応が生じる可能性がある。本校においても突然泣き出す、机の下に隠れる、といった行動が見られた。彼らの両親はほとんどが十分な日本語能力を有しないため、家庭内では、ほぼ日本語で会話することがなく、母語と日本語とを往復する言語環境に身を置いている。そうした中で、日本語を習得する困難さから退行現象を生じさせる児童もいた。

こうした状況を日本人児童と同様に捉えるのでなはく、当該児童の言語的・文化的背景にしっかり関心をもち、児童に寄り添い、保護者と連携しながら理解に努める必要がある。外国籍児童を有する学校においては、児童が自身のアイデンティティを肯定的に捉える環境づくりが重要となる。

７．受け身的な立場から発信する立場に～国際教育の視点で

(1) 外国人児童ができないのは日本語

外国人児童は、他の児童からするとお客さん的な存在になりがちである。しかし彼らにとっての障害は日本語である。彼らは日常的に母国語での思考をしており、様々な課題を解決する能力も有している。

こうした個々の実態を理解し、担任と連携し教室の中での居場所づくりをすることが大切である。たとえば、授業内に彼らの出番づくりや交流の機会をつくることで、周りの児童の見方も変わると思われる。

(2) 国際学校の特色を生かした国際教育

本校のように外国人児童が在籍する学校の実態を生かして取り組んでいることの１つが国際教育の充実のための環境づくりである。

例えば、職員室・事務室・保健室・図書室等、外国籍児童が利用する特別教室に７カ国語（日本語・英語・インドネシア語・ベンガル語・ベトナム語・中国語・モンゴル語）での名称表示をした。日本の児童が「どこの国の言葉だろう」と興味をもてるよう、国名は記していない。また、長年放置されていたパソコン室前の展示ケースを大掃除し、海外の資料を展示し直すと共に、それぞれの表示も新たに作成し、他の児童の興味をひく工夫をした。

さらに、日本の児童に母国の様子を教えてほしい、と外国人児童の保護者に呼びかけると、あっという間に多くの写真やプレゼン資料が送られてきた。「こういう機会を待っていた」とのことで、保護者の方々はこの提案申し出に大変喜ばれた。ぜひ子どもたちに話をさせてほしい、という申し出も多数あり、私自身が海外生活をしていた頃のことを想起しながら、海外に住む者の立場で考えるという視点を大事にする必要性を改めて感じた次第である。これらの資料はパネルにまとめ、児童が最も多く通るホールに設けた「国際コーナー」に掲示した。

併せて海外生活経験をもつ本校教頭の協力を得て、現地の衣装や異文化理解につなが

る資料を展示した。多くの児童が関心をもち、衣装を身にまとう児童も増えている。

こうした取組は、本校に多く在籍する外国籍児童をマイノリティのままにしておくのではなく、ここからの異文化に関する発信や、そのことによって他の日本人児童が異文化に興味や関心をもつこと、何よりも外国籍の友達への理解を深めることにつながると考えている。

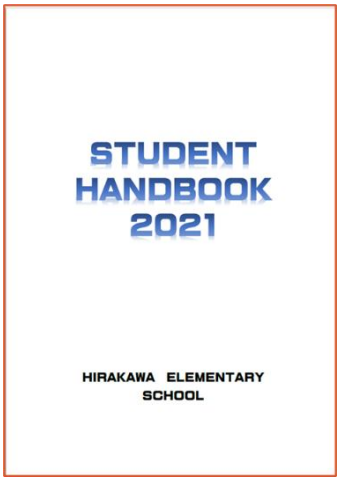
(3) 外国語教育との連携

保護者からの情報収集をもとに外国語科の異文化理解に役立つコンテンツ作成を進めている。これは主に高学年の外国語科における「言語活動を伴った異文化理解」に関わるもので、現行の教科書にある内容を本校児童の母国の生活文化に置き換えることでより生きた学習が実現すると考えるものである。

また、「外国語」教育の意味を再認識し、外国籍児童の母国の文字や音声にふれる中で、日本語や英語の文字や音、文構造との違いなどに気づかせる教材作成にも取り組んでいる。これは外国人児童を有する学校の特色ある教育活動につながると考える。

帰国を控えた児童の保護者に、現地からのネットを介したやりとりを提案すると、非常に前向きな回答があった。日本語教室の可能性の広がりを大いに期待するものである。

(4) 保護者との連携



こうした保護者との信頼関係を築くために心がけていることの１つが日本の学校教育を理解していない保護者への情報提供である。日常的に学校や学級からの様々な配布物の英訳や、英語を介したメールでのやりとりにより、学校での児童の様子を伝えたり、保護者の思いを聞いたりするようにしている。自分の子どもの人間関係づくりについての悩みや育ちについての相談をしてくる保護者もおり、日本の学校への敷居をずいぶん低くすることができていると考える。本校の教育活動内容を説明する英文でのパンフレット「STUDENT HANDBOOK」も作成し、編入学の際にそれをもとにした説明をするようにしている。こうした学校の「見える化」は今後大切にしたい。

併せて、毎朝の健康観察や欠席連絡を含めた日々の連絡が難しい保護者のために、ＩＣＴを活用した健康観察も継続している。

(5) 地域・社会の教育力との連携

本校校区内の山口大学には、留学生支援センターや「ＬｉＶＩ」という通訳ボランティアサークルがある。地域には留学生支援や地域住民との交流促進をする「ひらかわ風の会」という団体があり、外国籍児童の家族の支援を行っている。

県国際交流協会は日本語指導を要する児童の支援活動を加速化させており、県教委との連携も本格的に始めている。こうした団体等との連携強化にも努め、協議や情報交

換の場を積極的にもつようにしている。こうした中で、学校だけでは成し得ない地域の教育力を生かしたより幅広い支援が可能となる。

また、青年海外協力隊ＯＢによる外国籍児童のための日本語教室が毎週木曜日夕方や夏季休業中に開催されており、日本語教員がこの教室の支援にも参加している。情報共有をするとともに、児童を多面的に見取り、よりよい指導につなげるためでもある。

県内にある日本語学級や国際学級とのネットワーク化も始めた。現在は、情報共有や学校訪問により先進的な取組を学ぶことから始めているが、いずれは県内の日本語指導のシラバスを作成することや、大学との連携による県内の日本語指導の充実を支援するセンター的な役割を担うことも視野に入れている。

(6)オンライン交流

Google Meet を活用し、帰国した児童や児童が在籍する学校の児童たちとのオンライン交流に取り組んだ。これは、外国人児童の転出入が頻繁にある本校の特色を生かすものである。

昨年末に実施したのは、バングラデシュ・ブラマンバリア在住の児童と在籍していた学級との交流、バングラデシュ・ダッカ在住の兄弟とそれぞれの児童が在籍していた２学級との交流、インドネシア・スラカルタ在住の児童が通う小学校と在籍していた学級との交流の３回である。校内のインターネット環境を活用し、別の端末では学校内を移動しながら、より多くの児童が参加しての交流を行った。

リアルタイムでの交流は、地球上の友達が同時進行で「今」を生きている実感をもつことにもつながったようだ。また、帰国した児童たちとつながることで、様々な国際教育の可能性が広がるだろう。こうした交流を今後も継続するとともに、高学年児童においては、外国語を活用したコミュニケーションの場としても活用を図っていきたい。

８．おわりに

昼休みに１年生児童がナイジェリア出身の子を指さし、その子の名前を私に聞いた。「どの子？」と聞き返すと、その児童は、肌の色ではなく、「靴下が白い女の子」と答えた。それくらい本校では外国人の子どもたちが当たり前の景色の中に存在している。

しかしながら、そうした子どもたちを「外国人」というまとまりで捉えている児童が多く、それぞれの母国の文化や言語に興味をもって関わろうとする児童は少ない。また、外国人児童が必ずしも自分たちの母国のことをクローズアップされることを喜んでいない現状もあり、外国人児童の保護者の考え方とはずれが生じていることも浮き彫りになった。本校における日本語教室の役割はまだまだ多く、解決すべき課題も多い。関係機関等とのネットワーク構築を進めると共に、課題の共有や情報交換に今後も努め、よりよい指導へとつなげていきたい。

Ⅲ　第 28 回山口県国際教育研究大会

「ちがい」について考えよう　～ みんなが住みやすい社会にするために ～

ＪＩＣＡ中国山口デスク　　小川　真奈
防府市立華城小学校　教諭　山本　　直

１．日　時　　令和４年１月１５日（土）１３：４０～１４：４０
２．場　所　　ZOOM によるオンライン
３．参加人数　５７人　小中学校教員、ALT、スタッフ等
４．内　容
①プチ講座「JICA とは？」「JICA 海外協力隊体験談（ケニアでの活動紹介）」
・JICA や協力隊についての話。
・JICA の出前講座の傾向や多文化共生の必要性についての話。

②ワークショップⅠ：多文化共生とは、何か？

「私が望んでいることは、同じかな？ちがうかな？」

・２つの立場（日本人・外国人）から、友だちに望むことを考えることで、多様な考え方を知り、自分にできることは何かを考える。

山口県JICAデスク

ワークショップ①「私が望んでいることは、同じかな？ちがうかな？」

氏名（　　）

ワーク１　：　ダイヤモンドランキングを完成させよう

あなたが「日本人」として、ケニア人の同級生に望むことはなんですか？

① 日本語で話してほしい　1位 1枚
② 日本の文化や習慣を知ってほしい
③ 友達になってほしい　2位 2枚
④ 話しかけないでほしい
⑤ 「日本人だから〇〇」という思い込みはやめてほしい　3位 3枚
⑥ ケニア人と同じように平等に接してほしい
⑦ ケニアについて教えてほしい　4位 2枚
⑧ 考えや好きなことが同じであってほしい
⑨ 地域の人と仲良くなってほしい　5位 1枚

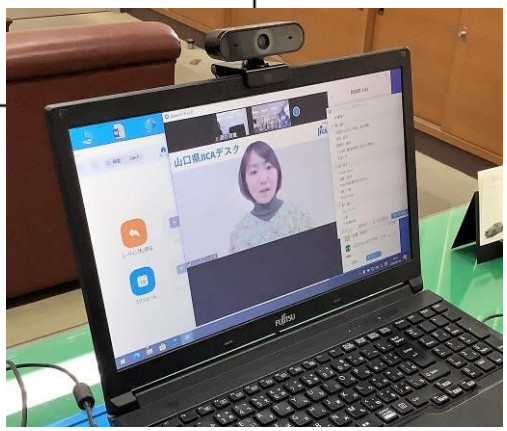
ワーク２　：　ダイヤモンドランキングを完成させよう

あなたが「外国人」として、ケニア人の同級生に望むことはなんですか？

① 日本語で話してほしい　1位 1枚
② 日本の文化や習慣を知ってほしい
③ 友達になってほしい　2位 2枚
④ 話しかけないでほしい（そっとしておいてほしい）
⑤ 「日本人だから〇〇」という思い込みはやめてほしい　3位 3枚
⑥ ケニア人と同じように接してほしい
⑦ ケニアについて教えてほしい　4位 2枚
⑧ 考えや好きなことが同じであってほしい
⑨ 地域の人と仲良くなりたい（紹介してほしい）　5位 1枚

ワーク３　：　みんなで話しあおう

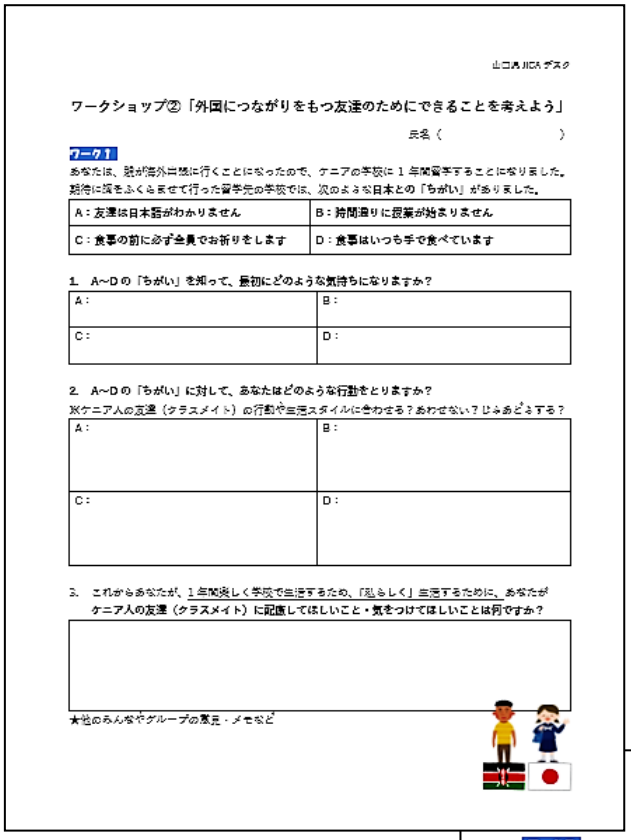
２つのダイヤモンドランキングを比べて、「ちがい」を話しあおう！みんなの意見をきいてみよう！



③ワークショップⅡ：クラスの中の外国人

「外国につながりをもつ友だちのためにできることを考えよう」

・日本人・外国にルーツを持つ人とともに、学校が過ごしやすい場所にするために、自分達にできることは何か考える。



山口県 JICA デスク

ワークショップ②「外国につながりをもつ友達のためにできることを考えよう」

氏名（　　）

ワーク1

あなたは、親が海外出張に行くことになったので、ケニアの学校に１年間留学することになりました。期待に胸をふくらませて行った留学先の学校では、次のような日本との「ちがい」がありました。

A：友達は日本語がわかりません	B：時間通りに授業が始まりません
C：食事の前に必ず全員でお祈りをします	D：食事はいつも手で食べています

1. A～Dの「ちがい」を知って、最初にどのような気持ちになりますか？

A：	B：
C：	D：

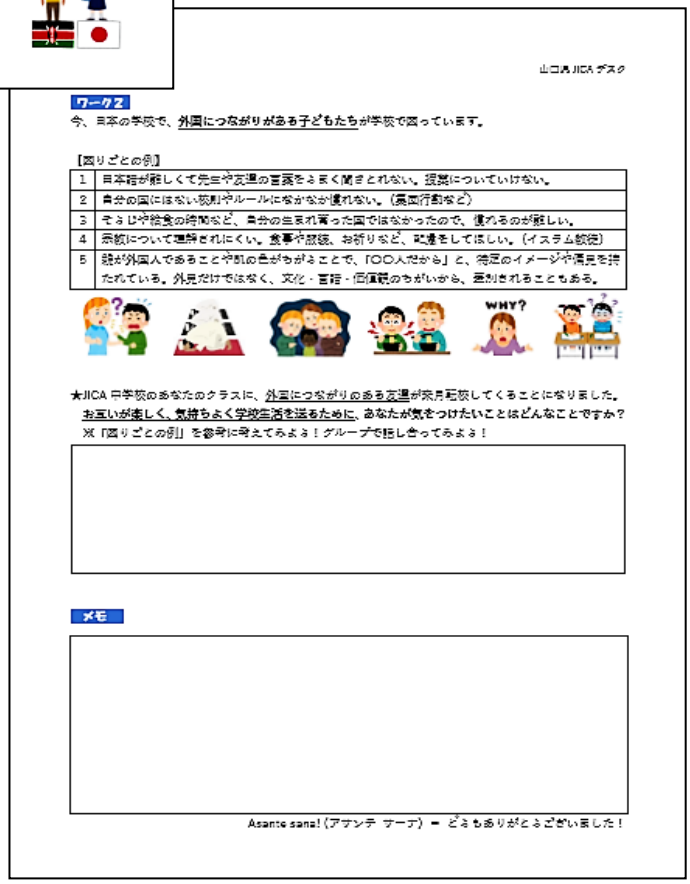
2. A～Dの「ちがい」に対して、あなたはどのような行動をとりますか？

※ケニア人の友達（クラスメイト）の行動や生活スタイルに合わせる？あわせない？じゃあどうする？

A：	B：
C：	D：

3. これからあなたが、１年間楽しく学校で生活するため、「楽しく」生活するために、あなたがケニア人の友達（クラスメイト）に配慮してほしいこと・気をつけてほしいことは何ですか？

★他のみんなやグループの意見・メモなど



山口県 JICA デスク

ワーク2

今、日本の学校で、外国につながりがある子どもたちが学校で困っています。

【困りごとの例】

1	日本語が難しくて先生や友達の言葉をうまく聞きとれない。授業についていけない。
2	自分の国にはない校則やルールになかなか慣れない。（集団行動など）
3	そうじや給食の時間など、自分の生まれ育った国ではなかったので、慣れるのが難しい。
4	宗教について理解されにくい。食事や服装、お祈りなど、配慮をしてほしい。（イスラム教徒）
5	親が外国人であることや肌の色がちがうことで、「○○人だから」と、特定のイメージや偏見を持たれている。外見だけではなく、文化・言語・価値観のちがいから、差別されることもある。

★JICA 中学校のあなたのクラスに、外国につながりのある友達が転入転校してくることになりました。お互いが楽しく、気持ちよく学校生活を送るために、あなたが気をつけたいことはどんなことですか？

※「困りごとの例」を参考に考えてみよう！グループで話し合ってみよう！

メモ

Asante sana!（アサンテ サーナ） ＝ どうもありがとうございました！

④クロージング
　多様性や多文化共生に関するワークのコメントや活用についてまとめる。

５．参加者の感想

・　ケニアでのＪICAの活動をわかりやすく伝えていただき勉強になりました。多文化理解のワークショップも有益でした。学校でもぜひ機会をもちたいと思います。
・　なかなか顔を合わせて話す機会がない昨今です。グループ協議の時間がもう少し長かったらよかったですね。 また、今後のつながり・発展を考えると、１回目・２回目のグループは変えてもいいですね。
・　いろいろな視点から考えること、考えさせることの大切さに気付きました。
・　ちがいについて分かりやすく解説いただき、深く考えることができました。グループセッションでさらに考えが深まりました。
・　日々の学習で活用できる活動や、具体的な資料を提供してもらえ感謝しております。ありがとうございました。
・　ブレイクアウトルームで意見交換ができ、よかった。
・　当方の機器のトラブルもあり、十分に参加できなかったのは、残念であった。
・　貴重な体験を交えたお話をいただき有難うございました。今回は実物を拝見できなくて残念でした。
・　多様な考えがあって面白かったです。
・　立場を変えてダイヤモンドランキングを作成することで、他者理解をしようとする気持ちや、相手の背景に思いを 寄せる思いやりの大切さが実感できました。 本日（1 月 17 日）に、早速本校の先生方に復伝しました。
・　英語だけでなく外国の文化、慣習、宗教等に関する授業は、大変参考になりました。
・　他の方と意見を交流することで新しい気付きがあり、ぜひ授業でやってみたいなと思いました。
・　実際に国際協力出前講座の内容を体験させていただいたので、とても分かりやすかったです。
・　子供達に多様性について伝えるための方法や教材を知ることができて、よかったです。授業に活用させていただきたいです。
・　国籍に関係なく子どもたちの実態に合わせて効果的な方法を学ぶことができました。

６．その他

・　「多文化共生」は、人権教育の立場からも重要な課題である。「ワークショップ」を通して話し合うことで主体的で対話的な深い学びの一助にもなると感じた。
・　今後も情報交換をしながら少しずつ「多文化共生」の考えを広げていけるとよいと感じた。また、実際に授業で取り入れている事例も増えている。実践事例を紹介しながら広げていけるとさらによいと感じた。

小学校外国語教育　全面実施後の成果と課題を振り返る
～ 学習評価から見直す指導の在り方 ～

文部科学省初等中等教育局　視学官
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部　教育課程調査官・学力調査官
直山　木綿子　氏

○ 日　時　　令和４年１月１５日（土）１５：００～１６：３０
○ 場　所　　ZOOM によるオンライン
○ 内　容

１．新教育課程全面実施の今年度における小学校外国語教育を取り巻く状況

・「言語活動」の理解が高まっている。
・「言語活動を通して」さらに理解を深める必要がある。
・専科教員の役割、学級担任の役割について課題がある。
・教科書の活用の仕方について理解を深める必要がある。
・一人一台端末を活用した授業の在り方について課題がある。

２．ICT 機器活用の国際比較（OECD　PISA2018 調査）

・日本は OECD 平均に比較し、日常生活では多くの生徒がデジタル機器を活用しているが学習には十分活用されていない。(最下位レベル)
・新学習指導要領では、ICT 等の活用により、指導の効率化や言語活動のさらなる充実を図ることを明示している。
・今後児童生徒自身が ICT 機器を操作する活動やインターネットを活用した遠隔地の教師・児童生徒等とつないでコミュニケーションをとるといった活動に、さらなる ICT 機器の活用が望まれる。

３．事例紹介

（１）熊本市の効果的・効率的事例紹介

①実践例　＜小学校第５学年外国語科・自己紹介をしよう＞

初めて出会う英語話者に自己紹介するという場面設定は、子どもにとって英語を使うコミュニケーションを図る動機付けになるとともに、言語活動中心の授業となる。しかしながら、１校に複数の ALT を同時間帯に集めるためには、本来の勤務校との調整が必要である。本事例では、ICT 活用の強みを生かして、市内複数の ALT は勤務地での空き時間に遠隔で本活動に参加しており、他の学校でも実施可能な活動としている。

②実践例　＜小学校第４学年外国語活動・理想のお弁当を考え、お家の人にリクエストしよう＞

理想のお弁当を考え、お家の人にリクエストするという場面設定は、子どもにとって英語を使うコミュニケーションを図る動機付けになるとともに、言語活動中心の授業となる。さらに、ICT 機器を利用して、おかずの画像をやり取りする中で、画像によっては、何のおかずか聞く場面も生じることにより必然性のある活動に展開できる可能性も秘めている。なお、従前の絵カード等の準備等も必要がなくなり業務改善にもつながる。

４．学習評価

実践例　＜小学校第５学年外国語科・あの人はだれ？＞を通した学習評価の在り方

・単元の目標と評価規準、評価基準の整合性を図る。
・指導と評価の一体化を図る。
・市販の評価場面は多いことがあるので、絞って評価する必要がある。

５．終わりに

一人一台端末を活用することが目的ではなく、外国語教育においては、その目標に記されている「言語活動」の充実、「言語活動を通して」指導が効果的に効率的に図られるように活用することが大切であることを改めて確認してほしい。

令和3年度 研究紀要（第17集）

『世界とつながり、心豊かに生きる子どもの育成』

発行 山口県国際教育研究会

Home Page：http://y-geso.chu.jp/wp2018/

発行日 2022年3月31日